戦前期「北の新地」街並みの復原: 竹本住大夫氏、田村富子氏、肥田晧三氏、西川梅十三氏の聞取り記録と文献史料をもとに

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/48273

戦前期「北の新地」街並みの復原

―竹本住大夫氏、田村富子氏、肥田晧三氏、西川梅十三氏の聞取り記録と文献史料をもとに―

笠井純一
笠井津加佐

一、はじめに

日本近代都市史研究において、花街はどのように位置づけられてきたであろうか。近世都市研究に始まった「遊廓」研究は、江戸吉原を中心に蓄積(1)を持ち、遊廓が「孤立する閉じた空間＝社会ではない」(2)ことも指摘されている。近年は三都だけでなく、対象は地方都市に広がり、近現代にかけて展開する実態の研究も進んでいる(3)。一方、近代大阪については、かつて都市を構成する「諸階層」の概念が掲げられ(4)、さらに個別研究を踏まえた全体構造の究明が目指されており(5)、具体的には明治期の松嶋遊廓研究(6)が注目される。しかし、近代における大阪「花街」の社会的機能を問う研究は未開拓である(7)。

ここでいう大阪花街とは、新町、南地、堀江、北の新地（以下、「北新地」と表記）の四花街を指す。これらはいずれも近世に起源をもつが、明治末年以降それぞれ変貌を遂げた。特に北新地は、一九〇九年（明治四二）の大火（天満焼け）によって焼亡した後、娼妓を全廃し、芸妓のみからなる「花街」として再営業を許可されている(8)。また南地でも一九一二年の火災（南の大火）以降芸娼妓分離が進み、堀江も一九二〇年代半ばには娼妓扱席が一軒だけとなった(9)。その結果、芸娼妓混合の遊廓は新町ただ一つとなり、それぞれが芸能を競い合う形で存続していたのである。このことは、各花街が総力を挙げて取り組んだ「大阪春の踊」（北新地浪花踊、南地芦辺踊、新町浪花踊、堀江木花踊）に象徴されている。

四花街は十五年戦争末期の大空襲によって灰燼に帰し、関係史料も湮滅したと考えられたので、本格的研究は困難な状況にあった。しかし、筆者らは北新地関係者から、疎開によってたまたま残された貴重な史料を一括して託され、関連分野の研究者の支援のもと、北新地を中心とする大阪花街の調査・研究を進めてきた(10)。筆者ら

は現在、北新地は社会から疎外された空間ではなく、むしろ大阪における政財界人や一部知識人が、芸能を結節点としてネットワークを形成する場であり、大阪の経済的発展にも寄与したと考えているが(11)、これを実証するためには多くの工程を経る必要がある。

筆者らはまず、北新地の実態を解明する基礎作業の第一歩として、その街並みを復元すべく、記憶を有する四人の方々に聞取り調査を行った。次にその聞取り記録と、調査参加者（証言者）による既公表の証言、または証言に関わる記事（以下、本稿では併せて「文献史料」という）を抜粋し、北新地の街並みに関わる記述をとり纏めた（本稿第三節）。さらに、聞取り記録や文献史料に登場する店舗等（北新地内外）の位置を示す略地図、北新地内の席貸（茶屋）等の所在地を示す略地図等を作成した（第四節及び図1～3）。続いて、聞取り記録および文献史料から得られた知見を総括し、筆者らの構想にそって今後の展望を述べた（むすびにかえて）。

聞取り調査は笠井純一と笠井津加佐が共同で行ったが（一部、佐藤恵氏の協力を得た）、そのテープ起し作業（聞取り記録の作成）、聞取り記録と文献史料の抜粋・考証（第三節及び注）は笠井津加佐が、略地図作成のための考証と作業（第四節）は笠井純一が分担して行い、それらの原稿をもとに議論を重ねて本稿を纏めた。

なお調査参加者の発話（証言）は多岐に亘り、かつ情報量が多いため、街並みに関係する部分を中心に抜粋した。筆者らは本稿の他、「北陽演舞場」、「北新地芸妓の日常」に関する二稿を四方の証言に基づいて執筆したが、紙数の都合で割愛し、別途公表したい。

二、聞取り調査の方法と文献史料の概要

調査参加者：戦前期の大阪で生活し、北新地で仕事をした方、浪花踊など花街の催しで芸能を鑑賞した方、さらに戦後早い時期の北新地で仕事をし、先輩方から戦前期の北新地について聞く機会のあった方など、左記四名（調査実施時の平均年齢八六歳、男女比二対二）の方々（年齢順）から、お話を伺った。

竹本住大夫氏（文楽大夫）二〇一五年四月二三日、於竹本氏宅
記録者：笠井純一、笠井津加佐、佐藤恵

田村富子氏（元北新地芸妓）二〇一五年一二月一六日、於北新地芸妓組合
記録者：笠井純一、笠井津加佐

肥田晧三氏（元関西大学教授）二〇一六年六月一七日、於池田市保健福祉総合センター
記録者：笠井純一、笠井津加佐

西川梅十三氏（西川流師範、元北新地芸妓）二〇一五年一一月一一日、於北新地芸妓組合
記録者：笠井純一、笠井津加佐

手続き：今回調査に参加いただいた方々には、調査の主旨が大阪花街の記憶、芸能の記憶を留めるためのものであることを予めお伝えし、その枠組みでご協力いただいた。調査は、基本的に自由発話の形式をとったが、調査者の関心事について具体的な質問をいくつか交えた。調査結果はsonyMDによって録音し、文字化した。なお、竹本住大夫氏は令夫人と共に原稿に丁寧な朱を入れてくださり、肥田晧三氏は全面的に書き直してくださった。

本調査における倫理的配慮：筆者らは予め、調査参加者の証言について、文字化した結果を提示し、必要によっては、原稿全体を提示

して確認を求めることを説明した。また調査参加者が、自身に関わる記述のうち問題があると判断したときは、いつでも調査参加を断ったり、記述の削除を求めたりすることができ、筆者らはその要請に従うことを説明して了解を得た。

文献史料の概要：本稿で取り上げた文献史料（二〇一六年九月までに刊行、公開されたもの）は、次の七点である。

史料①　竹本住大夫 聞き手＝髙遠弘美・福田逸『七世 竹本住大夫 私が歩んだ90年』（講談社、二〇一五）。

史料②　竹本住大夫 語り 和多田勝 取材・構成『文楽説き語り 言うて暮しているうちに』（創元社、一九八五）。

史料③　竹本住大夫『なほになほなほ 私の履歴書』（日本経済新聞社出版社、二〇〇八）。

史料④　竹本住大夫 聞き書き＝樋渡優子『人間、やっぱり情でんなぁ』（文藝春秋、二〇一四）。

史料⑤　ナビゲータ 仲野徹「大阪しち〜だいば〜③　花街華やかりしころを聞く」（『望星』7、東海教育研究所、二〇一六）。

史料⑥　西川梅十三、聞き手 土屋克巳記者「花街に生きて」①〜⑫、産経新聞記事（二〇〇五年九月五日、六日、七日、八日、九日、一〇日、一二日、一三日、一四日、一五日、一六日、一七日）。

史料⑦　松井宏員「わが町にも歴史あり 知られざる大阪」84〜94、毎日新聞記事（二〇〇八年六月六日、一三日、二〇日、七月四日、一一日、二五日、八月二二日、二九日、九月五日、一二日、二六日）。

以上七点の中には、本稿の聞取り記録と重複する記事もある。しかし、時期や目的が異なるのでそれぞれに特色があり、本稿の目的である北新地の街並み復原の史料としては、相互に補い合うものである。以下①〜⑦について、その性格等を略述しよう。

①〜④は、竹本住大夫氏の自伝的著書（既刊）である。このうち③は、著者自身の執筆にかかる新聞記事（日本経済新聞「私の履歴書」）を中心に、桂米朝、茂山千之丞、片岡仁左衛門、中村吉右衛門ら芸能界の四氏、松久保秀胤薬師寺管長との対談記録、さらに浄瑠璃「源氏十二段」に関わる記述を纏めたものである。他は記録者による聞取り記録であり、④は舞台引退後に、①は文化勲章受章後に出版された。当然のことであるが、いずれも文楽の大夫としての記憶や、芸についての述懐が過半を占める。しかし幼年期の記憶も鮮やかで、本稿が目的とする街並み復原に有益な事実が多数含まれていた。なお竹本氏は、本稿に収めた聞取り記録を詳細に読まれ、筆者らの過誤や不足を訂正・加筆して下さったので、既刊の著作も同様の工程を経たものと思われ、信憑性は極めて高いと考えられる。

⑤は、仲野徹氏（大阪大学医学系研究科教授）が西川梅十三氏をゲストに迎え、「大阪花柳界事情」を聞き取った記録である。⑥は土屋克巳氏（産経新聞記者）による西川氏のインタビュー記事、⑦は松井宏員氏（毎日新聞記者）が、西川氏ほか北新地を知る人士に行ったインタビュー記録等を纏めたものである。⑥・⑦はまた、筆者らの聞取り調査に際し、新聞記事コピーの形態で西川氏から提供されたものであり、聞き取り調査において西川氏は、努めてこの記事以外の記憶を語ろうとされた。そこで筆者らは、これらを西川氏の調査記録と同等の史料価値を持つ文献と考え、本稿の田村富子氏・

西川氏の証言を補完する史料として、活用することにした。なお、西川氏と北新地との関わりは戦後に始まるが、戦前の北新地について先輩芸妓他から多くを聞き伝えていると思われることは、本稿における証言と同様である。

なお肥田晧三氏には、学術論文や対談記事などが多数あるが、北新地関係文献については本稿の証言が群を抜いて詳細周到であるので、他の文献は引用しなかった。

三、聞取り調査記録および文献史料からの抜粋

調査参加者別に、氏名、聞取り調査記録（証言）、文献史料の順に記した。証言と文献史料の対応を明示するため、証言に「補注・通し番号」を付し、文献史料は証言者別に纏め、通し番号順に記載した。

なお、調査者や立会者の発話・行動は、「―」で始まる太字で示した。

竹本住大夫氏

「大江橋の北詰のもう一本手前で、わては、おぎゃ～と生まれました。育ったのが昔の地名で言うと、曾根崎新地一丁目で…ということは花柳界のど真ん中で。わたしはおぎゃ～と生れてからすぐに叔母の家（うち）(12)に貰われて…そこが文楽の大夫の家で…育ての親も、先代の住大夫も芸事が好きで、芸妓はんの踊りから寄席、映画、芝居…皆連れていかれましてね…」（補注1）

「もう…今の新地と全然違いまっせ。表通というのがあって、裏町で、北に細い筋があって、今で言うたら、四ツ橋筋をこえて、また西へ行ったとこにお茶屋があって…そして北陽演舞場が、そこにあったんです」（補注2）

写真1　竹本住大夫氏

「あの時分の北の雰囲気がもうもどりまへんけど、堂島あたりには、みんな芸妓はんの家があったんです。変な話やけど、芸妓はんの旦那衆が、堂島に家こうて、そこに住まわしたり。情緒もおました。死んだ曾我廼家五郎さん(13)も堂島に、ええ家がありました。あの…当時、私は生れは（大正）一三年ですけど、平野町に御霊神社というのがあって、そこに文楽があって、御霊文楽(14)と言うてましたけど、それが私が生まれたときに焼けて、それから暫くして大阪の四ツ橋文楽座(15)に変わったんです。

北にはお師匠さん方が、仰山いてはって、そのお師匠さんの奥さんが元芸妓はんとか、料亭してるとか多かったです。ということは、恥ずかしい話ですけど、文楽というところは、あんまりお金は儲かりまへんさかいな、みな、奥さんがたがそういう料亭したり、何かしてはりました。この頃は、そんなことする文楽技芸員、いまへん。野澤勝市(16)という師匠が「かつや」と云うお茶屋をしてはりました。先代錦糸兄さん(17)の親も、北新地の裏町で「ちよや」(18)という料亭をしてはりました。映画俳優で、松本泰輔（た

いすけ）(19)という、無声映画時分からの映画の俳優さんがいたはって、それが北陽演舞場の向かいで小さなお茶屋をしたはりました」（補注3）

「吉本が、寄席の花月(20)で、南は法善寺にあって、北の花月は新地の裏町にあったんです。それで私は替わるたんびに寄席に行ってました。子供時分から、エンタツ、アチャコ(21)やら、五代目の笑福亭松鶴さん(22)やとか、ええ噺家、ええ漫才師が仰山いてて。今思うたら、やっぱりええもん見たら、頭に残ってますな、文楽でも、歌舞伎でも…。関西歌舞伎も、いま歌舞伎は、東京へ行ってしもて…。上方歌舞伎の名ばっかりで…寂しいでっせ。今、東京に梅玉（ばいぎょく）さんという役者が出来ました。関西で昔の梅玉さん(23)は良かったですからね。死んだ富十郎さんに、なんで関西の名前を復帰しないのですかと、魁車(24)とか梅玉とか、と言うてね。

その時分は、情緒があって。堂島に米相場というのがあったんです。昭和九年か一〇年ごろ、もうなくなりましたが…。堂島というところも、昔はだいたい大名の蔵屋敷…そこに、米相場というのがあって…。北はなかなか、ええとこでっせ」

「永楽町というのが裏町でんねん。永楽町に花月があったんですわ、北に…。今だに老松通というのは新御堂の東側にあって、それが天満の天神さんにずっとつづいて…」（補注4）

「美人座(25)という超高級の…今で言うキャバレーですが。それをカフェーと言うてましたけど…。そこの女給さんがタバコ買いに来て、その人は美人座のスターやと言うて…。ホステス…一番の売れっ子、スターと言うて、きれいでした。そんなん見て大きくなりました…」（補注5）

「戦前の大阪は、情緒があって、みんな隣近所、親しみがあって、ほんまに暮らしよい、ええとこでした。食べもんも高級から大衆まで、どこへ行っても、まずいなと言うのはおまへんな。高いなら高いなりに、安いなら安いなりに、美味しいとこありましたね。今の新御堂の、北の新地から新御堂に出てくるあたり、昔は市電が走ってまして、そこに、阪急前、梅田新道、蜆橋、電車の停留所がおました。僕ら生れてからは、蜆川(26)というのはなくなりましたけどね。銅板が残ってました。近松の…。曾根崎心中で、お初天神…あれ、ほんまは露天神というんです。私のお祖父さんが…そこの東の門出たところにいました。私はしょっちゅう行ってたんで、お初天神は私等の遊（あす）び場でした。あの時分に、中華料理は少のうて、川口(27)には中華街というのがありましたけど、北の新地で中華料理やってたのは一軒だけ(28)でした」（補注6）

「私が幼稚園行ったのは、満六歳でしたから…懐かしいな…」（補注7）

「北の新地から堂島へ抜けるとこには、昔は、銭湯があったんです。大黒という…。ふと見たら、そこにバー大黒という看板が出てますねん。これやっぱり、「大黒湯」(29)の血筋かなと思ったり…。角にね「柳月堂」(30)というお菓子屋があって…。前川はん、私より下ですけど柳月堂…。うなぎ屋はんの「菱富」(31)…。歌舞伎の中村歌右衛門さんと踊った…寿魁（じゅかい）さん(32)になる前

が…大蔵（だいぞう）さん…、あの人が僕より三つ四つ下ですね。もう北行っても馴染みがのうて、寂しい…。こっちが長生きしてるか知りまへんけどな…。肉屋の「みやけ」(33)…南に「スエヒロ」、北にも「スエヒロ」(34)がありました」

「桜橋の角に「鳥幸」（とりこう）(35)いう鳥屋がありましてん。堂島へ行く道で柳月堂からちょっと入ったとこ、「鳥常」（とりつね）(36)という、これも鳥屋はん、ありまして…北には美味しいもん仰山ありましたで…」（補注8）

―北にはずっといらしたんですか？

「いえ、僕は、昭和一一年まではいてましてん。それから今里というところに変わったんです。小学校は西天満小学校、卒業するまで、ホンマは堂島小学校(37)ですねん。そやけど堂島小学校に行くには、御堂筋線と四つ橋線の電車道を超えんならん。親があぶないさかい西天満に行け言うて…、越境ですわ。月謝が一五銭のときに三〇銭払うてました。ホンマは堂島でんねん。そして、私の実家が堂島で兄弟衆はみな堂島出てますけど、私だけがそんなんで西天満で。昭和一二年に今里に変わって、私とこ実家が「淡路屋」(38)というて、旅館してまして…。ちょっとその当時は高級旅館で。料理は「うゑ清（せい）」(39)というところから朝膳とって、晩は「きくや」(40)という料理屋から料理とってましてん。お客さんが、「淡路屋はちょっと高いけど、食べもんがこっちの好きなもんいうてくれるのがええねん」と言うてはりました」（補注9）

補注1

「曾根崎新地におったときは、うちは玉井煙草店という名前でたばこ屋をやってました。玉井は母親の旧姓です。その店は、初め、実の両親がやってたんです。それが淡路屋を始めることになったので、うちの母親が譲り受けたんです。昭和十一年に今里に移るまで、そこでたばこ屋をやっていました」（史料①、一三頁）「狭いでしたね。下は二間、二階が二間と小さい部屋が一つで三間、そんなんです。入ったらすぐたばこ屋で、奥の大きなガラス戸棚に売り物のたばこが入っていました。店の土間を上がってすぐが居間でした。そこへおやっさん夫婦と僕と義理の姉とおばあさんと住んでましてん。今でいう御堂筋でんな、それができるまでは広かったんです。でも道路拡張で家を切られて、玄関を出ると、すぐ外が表通りで電車が通っていました。おやっさんは、蜆橋の電停から電車で四ツ橋の文楽座に通っていました。（改行）大きな仁丹のネオンの看板があってね。（中略）そのネオンを設置するときには、うちの家を宙ぶらりん浮かして地面を掘り込んだんです」（史料①、一六～一七頁）

補注2

「私の生まれた大正末期、大阪・北新地はずいぶんとにぎわっていました。今の新地本通りはもちろん、裏の道までびっしりお茶屋さんが並び、昼から三味線がそこここで聞こえてました。芸者衆の演舞場もあって、浪花踊りはそれは華やかでした」（史料③、一八頁）「大阪の花柳界には、京都でいう舞妓はんはいてません。姉さん方のお世話をしながら芸を覚える「仕込み」を経て、お店に出るときは芸妓と呼ばれます。江戸では仕込みのことを半玉と言いまんな。北新地にいた時分は夕方になると、芸妓はんが鬢付けの髪あげて、桶もって下駄はいて、うちの煙草屋の前をお風呂屋へ通ります。それを店先から眺めてました。（改行）芸者衆が年に一度集まって、芸を披露する京都名物の〝都をどり〟にならって、大阪でも〝浪花をどり〟を流行らせようと、曾根崎新地に建てられた北の演舞場も近所でし

たし、文楽の大夫や三味線弾きさんも周りに沢山住んでました」（史料④、一四二頁）

補注3「おやっさんの稼ぎは、おやっさんの親を養うのに使うさかい、それでは生活がでけへん。そやからうちのおふくろが、たばこ屋やお茶屋をしてたんです。文楽はそんな人が多うおましてね。先代の喜左衛門師匠（二世野澤喜左衛門）でも、奥さんが義大夫芸者。それをやめて、小さいながらもお茶屋をしてたし、内職してないほうが珍しかったです。うちの家内のおじいさん（七世竹本源大夫）はレコードの吹込みがあるし、素人さんのお稽古があるので文楽以上の収入があったさかい金持ちでしたけどね」（史料①、三九～四〇頁）

補注4「老松座という芝居小屋があって、後では映画館にもなりました。花月というのが永楽町にありました」（史料①、二二頁）「僕が行ってた時分は無声映画やから、「ネオ・スーパー・トーキー」と言うて、弁士が映画の中でしゃべってるんですよ。（中略）それからやっとオール・トーキーになりました。昭和十年、いや、八、九年というとこでんな。老松座には桟敷席と、大衆席というか普通席がありました（中略）老松座で桟敷が三十銭ぐらい、大衆席が二十銭ぐらい。僕ら子どもは十銭でした(41)。時代劇と現代劇の二本立て。老松座は、帝キネ、帝国キネマというて、そのあとで新興キネマに変わった映画会社でした。そこの二番館だったんです。封切りは道頓堀でやって、その映画が二番館で老松座に回ってくるんです」（史料①、七一～七二頁）「花月は、大阪の南は法善寺、北は北の新地と本通りの裏に裏町という、ちょっと小さいところがあって、そこが北の花月。当時の一流の漫才師、落語家はかけ持ちしてましたね。これは寄席専門でしたね。北の花月はちょっと入りが悪いんです。お客さんが少ない」（史料①、七六頁）

補注5「外国たばこを扱っているのは、北の新地ではうちだけでした。それで近くにあった美人座というカフェーの女給さんからそこのお客さんからみな、たばこを買いに来るし、芸子はんは来るし」（史料①、一九頁）「うちから七十メートルほどの場所には、その名も「美人座」というカフェーがありました。いまで言うなら、超高級キャバレーです。そこのナンバーワンの女給さんは「スタア」と呼ばれて、赤やピンクや青の鮮やかな色の着物をきて、いい匂いをさせて、街を歩きます。（中略）芸妓はんとは違うハイカラな明るい感じは、子どもの目にも魅力的でした」（史料④、一三八～一三九頁）

補注6「北の新地は大阪のど真ん中。東京で言うたら新橋か赤坂のようなところです。花柳界が盛んでしたから、何や雰囲気がやわらかい感じでしたね。下町とは違います。品は悪いことおまへん」（史料①、一四頁）「うちの親父さんの先代住大夫も、お初天神のすぐそばの、自分の父親が暮らしてた家を、文楽の若手や素人さんの稽古場に使うてました。ここは坪庭のある、ええ風情の一軒家でした」（史料④、一四三頁）

補注7「僕、一年、幼稚園に通うたんですけど、越境でんねん。小学校は今でいう西天満小学校ですが、幼稚園も西天満幼稚園というて、同じ敷地の幼稚園に通うてたんですわ」（史料①、一三頁）

補注8「老松町に「更科」というどんやがあって、そこからうどんの出前をとったり、北の新地に「鳥常」という鳥屋があって、そこの玉子丼や親子丼を食べたり。あと、堂島川や土佐堀川の橋のたもとに舟が繋いであって、それが鰻屋をやってました。大江橋のが「美濃吉」で、淀屋橋のが「柴藤」と言うてました。そこに親と鰻を食べに行ったり。堂島川をポンポン船が通ると舟が揺れて、それは風情がありました」（史料①、二〇頁）「うちの左どなりは木村屋のパン屋さん、右どなりは大家さんで、お茶の葉のお店です。近くに洋食屋もあって、私が家で出されるご飯に好き嫌いすると、親が「洋食屋で

オムレツ、言うときなさい」と、それほど近所でした」（史料④、一三七～一三八頁）「寄席の「花月」もこの近くでした。あれほどずらりと軒を連ねていたお茶屋が姿を消して、アーケード街に様変わりした通りを歩いていたら、大黒ビルという名前に行き当たりました。私が子どもの頃にあった「大黒湯」というお風呂屋さんの跡地です。注意して見ると「いとう」や「いか里（り）」、昔からの料亭割烹がわずかに残っていました」（史料④、一四四頁）

補注9「まあ大分過保護やったんですな。当時の月謝が十五銭ぐらいやったと思いますが、ところが私は越境入学ですので三十銭。（改行）えらい物入りですが、けど母親としては電車道もそうですが、堂島の方へ行くと、昔自分の出ていた新地のあたりを歩かさんならん。となるとどんなことで私が貰い子やということを誰ぞから聞かされるやも知れん。（中略）出来たらあんまり小さい時分から知られとうない、そんな思いもあって、三十銭はずんだんと違いますやろうか」（史料②、一四頁）「淡路屋旅館は代議士が使うような高級な宿でした。私の生みの父親は、文楽の三味線弾きをしていましたが、兵隊検査で「楽隊屋か」と係官に言われて、嫌になって文楽をやめたと聞いてます。（中略）生みの父親の父親、私の血のつながったお祖父さんにあたる人も、鶴澤七兵衛という芸名の文楽の三味線弾きで、死ぬまで素人さんに稽古をしていました」（史料④、一四〇頁）「うちも煙草屋のあと、これから先を見越して、人の増えつつあった新興地の花街・今里新地で、〝照茂登〟というお茶屋を始めました。母の名がテルやったのと、本名の岸本を合わせた名前です。母は父に見初められる前は、北新地の芸者でしたので、お茶屋のおかみさんになってからも、お客さんの前で三味線を弾いてました」（史料④、一四二頁）

田村富子氏

「北新地は、大きなお茶屋がたくさん本通りにありましたからね。それで、今、大きなビルが建ってまんねん。本通りから裏町までぬけてたお茶屋さんも多いんですよ。大きなお茶屋さんがね」（補注10）

―裏町と仰るのは北側ですか。南側ですか。

「大きなお茶屋さんは北側、なんでて言うとね、南側には蜆川がありました。これが本通りでしょ。北側でしょ。南側でしょ。この裏が蜆川が通ってましてん。そやから、こっちは割に小さいお茶屋さんがあって、こっちは抜けてるから大きなお茶屋さんが、平鹿（ひらしか）(42)とか昔の伝法屋（でんぽや）(43)」

―聞いています。記録にあります。

「そうでっしゃろ。でんぽ屋。お茶屋さん。ええお茶屋さんでした」

（閑話休題）

「新地もな、お茶屋さんもいっぱいおましたな」（補注11）

―街並みとかで覚えてらっしゃることありますか。

「ありまっせ、街並み、北新地で…本通りは両方がお茶屋さんでしてん。一六五軒おましてん」

―お茶屋さんが一六五軒。

「ふん…そんでね、本通りのも

写真2　「新地本通」の光景
（第2回『北陽浪花踊番付』1916年による）

う一つ北側の永楽通りおまっしゃろ。あっこもお茶屋さんでしてん。そんでね、北の新地に花月の寄席がおましてん。あそこに。あの吉本さんがいてはったやろ」

―梅十三　そこがお師匠さん（花柳禄美之）のおじいちゃん(44)がやりはったところ、永楽館。

「それが花月になった。花月に売らはった。吉本に売らはったんですやろな。その時分知らんけど、花月の時分はよう知ってましたわ。はいはい花月の横、とろとろと降りまんねん、坂」

―梅十三　下腹（したばら）」(45)言うて今も残ってます。

「あこにうちら下腹言うてましてん」

―梅十三　あこ、しもた屋がありましてん。

「芸妓はんの屋形がおましてん」

―おうちを屋形言うのですか？

「そうでんねん。そいでね、堂島のね、船大工町とその下腹のとこと。芸妓はんの屋形。堂島通りいうのが今おまんねん。新地のもう一つ南の通りですわ。あこがずっと芸妓はんの屋形でしてん」

「そやからね、すっと行きますねん。どこでも行けますやろ。男衆（おとこし）さんいうのがおましてん。大西(46)でも三〇人くらい男衆さんいてましたわ。上の男衆さんと下の男衆さんと二人つきまんねん」

写真3　京都「吉兆」にて
（北新地「鶴太良」蔵。右から、梅十三氏、田村富子氏、「鶴太良」大女将、太美子氏、梅さだ氏、「鶴太良」若女将）

―一人の芸者さんに？

「ふん」

―梅十三　用事走る人と、着物着せる人と別にあるのや。

―着物を着せる方が上の方で？

「上、上、ふん、荷物持ったりするのんがちょっと若いの」

―梅十三　地方（じかた）さんのお姉さんだったら、三味線を届けに行くとか…

「雨降ったら傘と高下駄を屋形へね、取りに来てくれはって交換して、ちゃんとお茶屋さんに持っててくれはりますねん」（補注12）

―豪勢というか華やかですね。

「まあね、昔の花柳界いうたらね。髪さんな、日本髪結いますやろ、それとね、家にあってもみな銭湯行ってましてん。全部、銭湯。自分の家で入らしまへん。ところがね日に何回行っても月に五円、髪さんも五円。昔の五円が値打ちあったんでんな。お風呂へ私ら行きまっしゃろ。こんなとき、先輩がいてはりますがな。背中流さんならん」（閑話休題）

―北の演舞場のことですけど、焼けたのは…あれは何時でしたか？

「堂島大空襲が…六月と思います」

―やっぱりそうですか。三月一三日だと思ってたんです。

「違いまんねん」

―梅十三さんにお借りした記事の写真、新聞に写真が残ってて、六月かと思ったんですけど、それを確認したくて。この写真は？

―梅十三　あれは毎日です。

「むこうにおましたさかいにね。なんか、新地の中にあった…。四つ橋線とこに毎日新聞、そしてね、裏が診察所㊼でしてん」

―梅十三　その裏に住んではった。

「一番最初は、薬師さん㊽言うてね、そこにおりましてん。その前はね、戦前は、堂島でしてん。そこで三月に焼けましてん、大阪」

―それは、有名な大空襲。

「ね、どこも逃げるとこおまへんやん。ほったらかして逃げて。ほんで六月に天下茶屋の下で、行くとこがおまへんで、そしたら、また焼けて、九月の甲子園で、また、焼けましてん。ほんでね。ホンマに何にもなしでね。えらいこっちゃな思うて、親子三人がほんぐぁらほんぐぁらしてましてん。そして、また堂島へ帰って来ましてん」

補注10「つた子さんの話は、「北新地」の呼び名から始まった。「ほんまは北の新地です。昔はみな、そう言うてました」。（中略）当時の北新地は、「本通は三階建てのお茶屋がズラーッと、北側の永楽町通にもポンポンと。格子あって行燈あって」という花街。（改行）昭和初めには、お茶屋二〇〇軒、検番一一軒、芸妓七〇〇人を数えた。検番とは、芸妓扱い所。芸能界でいうところの芸能事務所で、芸妓は検番に所属し、ここから派遣される。（改行）本通を「表町」、永楽町通を「裏町」といい、北新地はここまで。お茶屋の子弟は住んでるし、検番に住み込みの見習芸妓もいた」（史料⑦、二〇〇八年六月一三日）

補注11「芸妓とお茶屋と検番、これが花街のいわば三位一体だ。どれが欠けても花街は成り立たない。検番は芸妓扱所ともいい、芸能界に例えるなら所属事務所というところだ。（改行）仕組みはこうだ。料理屋で宴会する客が「芸者を呼んでくれ」と言えば、お茶屋に連絡が来る。お茶屋はひいき客の好みに合う芸者さんを選んで、検番に「何時にどこへ」と依頼し、芸者さんがやって来る。花代の請求書は、検番からお茶屋に回される。（改行）北新地には平田席、大西席の二軒の検番が健在だ。（中略）「検番はひいおじいさんの代から。明治の初めくらいかな」と、ご主人の平田眞司さん（六六）。大正期に電話がついた時、最初に引かれた一軒で、番号は八二三番だった（中略）住み込みといえば、戦前は若い女の子を住まわせ、お茶やお花、踊りに三味線を教える検番もあったとか」（史料⑦、二〇〇八年八月二二日）

補注12「その昔、検番に付き物だったのが男衆。芸妓さんに着物着せたり、三味線持って行ったり、あんパン買いに走ったり。前回紹介した天神祭の八処女では、人力車に一人付いた。「ぼくが継ぐ前は六人いましたわ」と平田さん。梅十三さんの解説。「男衆さんは担当の芸者さんが決まってて、一人で五人もったり」。主な収入は、芸者さんからのご祝儀だった」（史料⑦、二〇〇八年八月二二日）

肥田皓三氏

「私は実際には北新地のことは何一つ知りません。ただ北新地に関する文献に大へん興味を持っていて、長年注意を向けてきました。今日は北新地の文献について話をさせていただきます。戦前の昭和初期の北新地での行事の刷物二枚、たまたま持っています

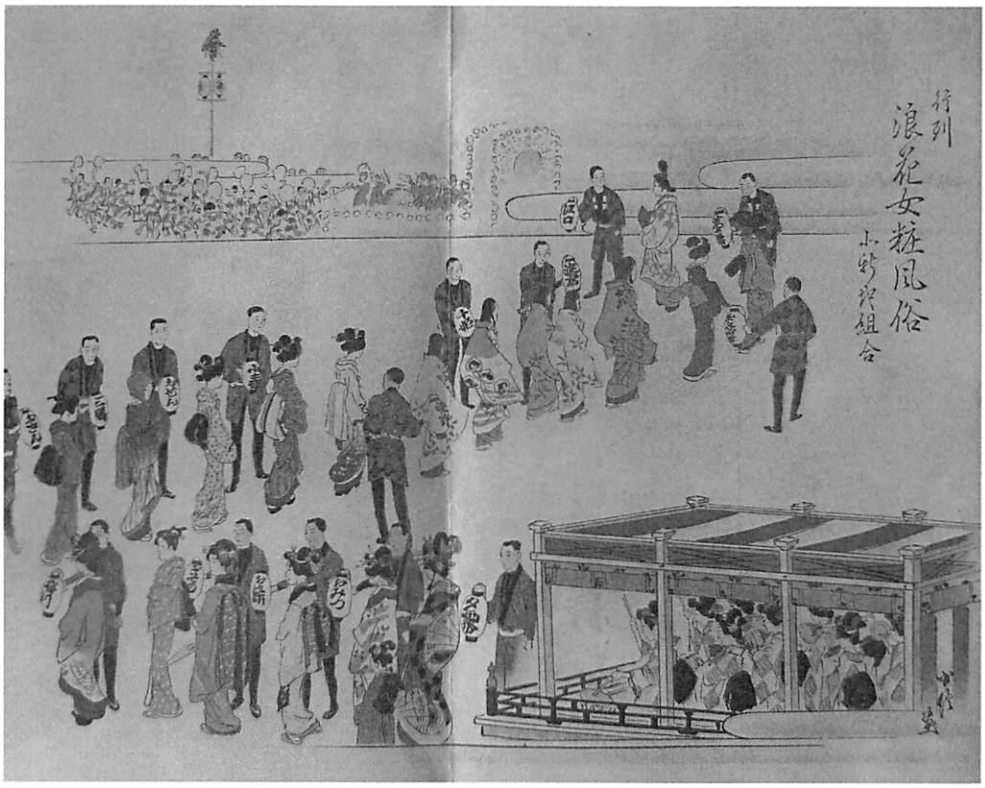


写真４　「浪花女粧風俗行列」図（肥田晧三氏蔵）

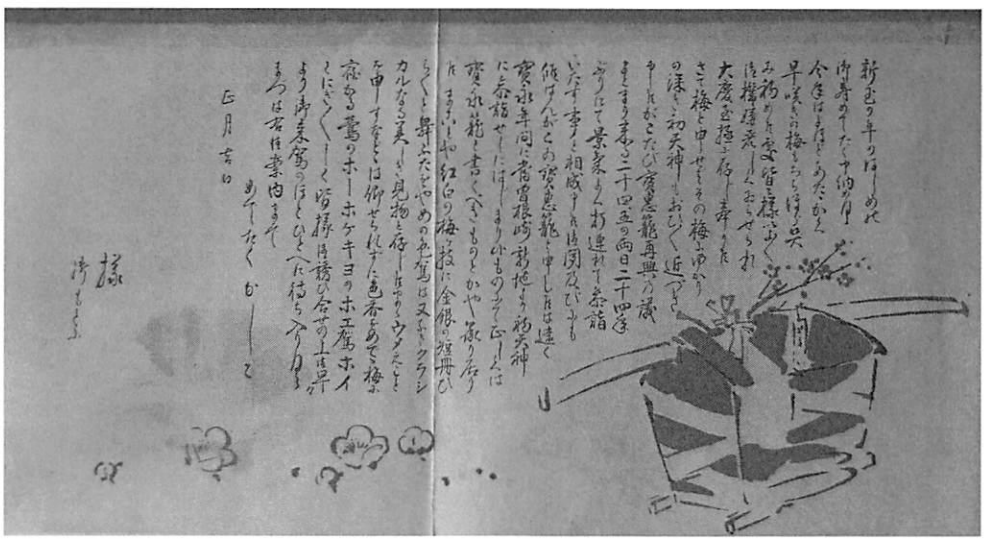


写真５　「宝恵籠行事」再興披露刷物（肥田晧三氏蔵）

ので、まずそれを見ていただきます。一つは「浪花女粧風俗行列」と題した色刷のものです（大きさ25×32）。北新地の女性たちが芝居や踊りの女主人公に扮して行列し、新地を練り行く様を写しています。江口の君、葛の葉、玉手御前、淀君、千姫、菊野、小春、樽屋おせん、三勝、おさん、梅川、おその、お染、お光、夕霧の十五人が美粧し、その行列のうしろに囃子屋台の従う図です。長谷川小信が画いています。刊年は無いのですが、昭和十年前後のものだと思います。もう一枚は、十日戎に北新地から天満宮に奉納する宝恵籠行事の再興を披露する刷物、色刷で大きさ20×38、宝恵籠の図入りです。文面は宝恵籠に乗る芸妓から贔屓客に宛てる手紙の文章になっています。これも正確な発行年がわかりませんが、やはり昭和十年前後のものと推定します。

新町では毎年六月の住吉大社の御田植式に植女を奉納し、神社に向う美々しい行列の刷物を発行しました。ミナミでも毎年十月の住吉大社の宝の市に市女を奉納し、神社に向う行列を絵図にしました。両行事とも明治以来連綿と続き、昭和になって絵図を出すようになりましたが、日中事変が始まり、昭和十三年以後は自粛して行事を中止しました。また堀江廓では毎年のお盆の時に絵行燈を廓中に飾る行事が連年行われており、一流画家の揮毫した行燈の並ぶことで有名でした。ここに昭和十二年の案内状を持っています。この年に揮毫した名家の連名を記しています。京都から菊池契月、上村松園、西山翠嶂、堂本印象ら、大阪から菅楯彦、須磨対水、北野恒富、庭山耕園、矢野橋村、生田花朝、木谷千種、島成園らの豪華な顔ぶれですが、これもこの年を最後に中絶しました。他廓のこうした伝統行事に匹敵するものが北新地になかったので「浪花女粧風俗行列」が新しく考案されたのでしょう。おそらく北新地組合の佐藤駒次郎氏の企画だったと思われます。しかし折角の行事も昭和十三年以後は時局に鑑み自粛中止され、長く続きませんでした。新町の御田植奉仕は戦後に復活して現在も続いています。ただし新町の芸者さんが居なくなり、ミナミ大和屋のおかみさんが伝統行事保存に力を尽され、上方文化芸能運営委員会を組織して、十日戎のミナミの宝恵籠と住吉の御田植式の植女奉仕の行事を守っておられます。宝の市行事は戦災で装束一切を焼失し、戦後はよう復興せずでした。北新地の行事も戦後よう復興せずでしたが、近年お水汲み行事を新しく発足させました。堀江は遊廓自体が戦後消滅です。

江戸時代に遊里を題材にした「洒落本」という文学作品が数多く著作され、文学史の一つの分野を形成しています。江戸、京、大阪の各遊里の状景を主題にした作品群です。江戸を描いたものが断然多いのですが、大阪の作品もいくつかあります。北新地を題材にした「言葉の玉」「粋の筋書」「北華通情」「廓回粋通鑑」（しまめぐりすいつがん）、いずれも寛政六年（一七九四）刊行、「北川蜆殻」（ほくせんしじみのから）文政九年（一八二六）刊行の五作品がのこっています。同じ年に四つも曾根崎文学が同時に出たのも異例ですが、「粋の筋書」「廓回粋通鑑」は鷺見屋淇楽作、「言葉の玉」「北華通情」は春光園花丸作、花丸のに淇楽が跋文つけたり、淇楽のものに花丸が序文を書いたり、両人の経歴は不明ですが、文筆の立つ仲よしの遊び仲間だったらしい。「北華通情」

は北新地のことを書いてじつに詳しい内容です。お茶屋の名前、芸者の名前、太鼓持の名前、遊客の名前が作中にどんどん出てきます。しかしあまりにも内情を穿ちすぎ、当時の人は面白く見たのでしょうが、時代を隔てた我々はそうした穿ちの中味が理解出来ず、何を言うているのか全くわからない、ということになっています。「廓回粋通鑑」は絵本仕立てで、北新地の様子を毎頁絵で示し、それに説明文が付いている。ですのでこの本を叮嚀に見て行くと曾根崎新地の風俗と習慣、廓の明け暮れ、女性たちの気性や遊客のあそびのさまがじつによくわかる。数ある洒落本の中での白眉の名作です。原本は伝存するものが極めてすくなく、早稲田大学図書館に一冊所蔵されているだけの稀本でした。それが稀書複製会から原本どおりの複製が出版され、我々はその本でたやすく読むことが出来るようになったのです。稀書複製会は江戸時代の珍らしい本を原本のまま複製するという、貴重な仕事を大正初年から昭和十八年までに続けた団体です。ところが平成になってから、大阪の古書肆中尾松泉堂に「廓回粋通鑑」の原本が出現したのです。この本が古書市場に現われるとは全く思ってもいなかったのでびっくりしました。幸い私が入手しました。表紙と巻頭の数頁の欠けた本でしたが、中味は綺麗です。大阪で出版した本であるのに、従来、大阪に無かったのが、やっと大阪で持ち伝えることが出来るようになりよろこんでいます。以上にあげた曾根崎新地洒落本の諸作は、昭和五十年代に中央公論社の刊行した『洒落本大成』にすべて収録され、いまはそれによって、いつでもたやすく読めるようになった。『洒落本大成』の付録月報第十三号（昭和五十七年七月）に、私は「曾根崎」の一文を寄せ、曾根崎新地沿革と関連の資料や文学作品について述べました。これは、のち拙著「上方風雅信」（昭和六十一年）に収めました。

「吉原細見」に代表されるように、遊里には細見という出版物が付きものでした。そこの廓のお茶屋の連名、そこで働く女性たちの連名を載せた名鑑で、遊客の案内手引の役目を果したのです。吉原細見の場合は、江戸時代初期から明治時代まで毎年欠かさず発行されるという特別のことでした。大阪は新町の細見が江戸時代後期に僅かに八冊が発行されています。曾根崎新地の場合、幕末の慶応三年と四年の二回発行されました。ここに持って来ましたのは、慶応三年の「北陽細見記」です。7×16の横長の小さな本で、この形を「三つ切り本」または「三切れ」と言うています。「なには北のしん地妓名細けん、全一冊」と題した外袋が付いています。いま出来てきたような美しい保存のよい本です。昭和三十二年ごろ、大阪の古書肆杉本梁江堂で購入しました。新地のお茶屋二十三軒の名前とそこで働く女性名を記しています。巻頭に手酌半四郎（戯作者一荷堂半水の別名）の序文と初代長谷川貞信の「北廓繁栄之図」の色刷の素晴らしい絵（28×6）が入っています。新地の中央に架かる「樋の橋」を渡る廓中の人々二十五人が美しい色彩で描かれているのです。貞信画の名作の一つに数えて良い作品です。地下鉄東西線の工事のとき、梅田新道と桜橋のちょうど中間の地点で、大へんな出水騒ぎがあって、工事が中断しました。むかしこの地点に井路川が北から流れて蜆川に注いでいました。工事はこの川に突き当ったのですね。貞信の画いた「樋の橋」

は、ちょうどこの井路川に架っていました。佐古慶三氏の「北ノ細見考」（昭和二年十月希有文庫刊）に「北陽細見記」は慶応三年と同四年の二冊があると書いておられ、私は慶応四年版を欲しいと長年探していました。昭和六十一年に東京の古書目録でやっと手に入れることができ、三十年ぶりで二冊が揃いました。この書の巻頭に一荷堂半水が「恋々山人」の筆名で曾根崎新地の沿革を書いています。佐古氏の「北ノ細見考」にこの文章をそのまま引用して重視していますが、北の新地沿革史にとって大切な史料です。大阪府立中之島図書館に所蔵する「反古帖」は大阪の古い資料を張り交ぜた、一種の資料集と言える冊ですが、この中に「北国の遊妓」（こしじのゆき）と題する曾根崎細見が一冊まるまる貼ってありました。いつ頃の細見か、推定はむつかしいのですが、文化文政頃のものらしく、新資料の発見でした。平成二十一年に又もや東京の古書目録で「浪花北新地芸子一覧」と題した小さな一枚刷を手に入れました。17×23の大きさ、お茶屋十一軒と女性たちの名前を記しています。思いがけない資料でした。年代は判定できませんが、「北国の遊妓」と「北陽細見記」の中間ぐらいの刊年と思われます。これで北新地の細見が四つになったのです。

明治時代になってから「芸者評判記」という書物がいくつか出版されます。芸妓の容色を評判した内容ですが、この種の本は図書館には一切所蔵がなく、低く見られていた書物群です。私は大阪の資料が好きなので、集めるともなしに気をつけてきましたものの、評判記の古書市場に出るのは至ってすくなく、入手はなかなかむつかしく、やっと七、八冊を持っているにすぎません。そのうちの「花柳仙郷」（明治二十二年）と「浪花の華」（明治三十六年）の二冊に北新地の記事があります。それぞれ十一軒の茶屋と女性名を載せています。しかし両書に共通するお茶屋は五軒だけ、わずか十数年間に、この世界の隆替の激しいことが窺えます。

以上見てきたとおり、寛政時代から明治までの百年間に、新地の文献は飛び飛びにわずかのこされているのが現状です。北新地沿革史を探るとしても、こんな資料しか無いのです。しかし、これだけでも残されたことを幸いとすべきと考えます」

西川梅十三氏

―花街の雰囲気というものを話して頂けませんか。

「やっぱりね…華やかでしたよ…あの…必ず太鼓やらあれが出ましたね…どんどんとたたくとか、だいたい宴会の二次会に見えて、わーっと、お客さん、遊ぼうというときは、大太鼓が出てきてね…ゲームしたり…ちょねちょね言うのは、少なかったですわ。お客さんでお酒ついだり、飲ましてもろたり…おこたの上で喋るいうのは少なかったです。まあ、京都やったら小座敷があったり、そんなんして、ゆっくり喋ってはるのもありましたですやろ…だいたい皆さん、お客様も華やかで、うわ～っと遊ばはった人が多かったですけど」（補注13）

―北のお客さんと南地とかのお客さんは、少し違いましたか。

「違います…」

―どういう風に違いましたか。

「あのね、南の方は現金でも遊びにきはるいうのは、きさくに…

お客様が見えたというのです。個人会社が多かったと…南は」（補注14）

―大阪の地元のお薬屋さんとか…

「はい、そうです。個人会社の…ま…ものすごう大きくやってはるお金持ちのボンボンとか。…ね、そういうのが多かった…それでね、北の新地は株式会社が多かった…」

―そうですか…かたいところのお客様が多かったと…

「ですから株式会社…堅かったわけです」

「やっぱり…個人会社の若旦那など、無茶遊びされますやろ…北は少なかったです」

―社長さんとか、役員の方…、堂島とか北浜とか、いろいろありますから…

「そうです」

―そういうところの方も多いのですか。

「はい、そうです」

「北浜も皆さん戦後…こんなんやってはった方が出世してきはったら…おちて、あの…落ちましてな…言うてたら怒られまして、何言うてるいうて、「落ちる」いう言葉は絶対ご法度…上がる話せい言うて怒られました。何かもの言うたら落ちる…あかんあかん言うて、そういう気疲れはものすごうありました。株屋さん…あ…いややわ…言うてました」

―株屋さん…中之島とか一杯ありました。昔はお米ですよね

「お米はね…お米の相場してはる人は、うちらはご縁がないです」（補注15）

―会社が一杯あり…

「宝永元年(49)から、堂島新地(50)から始まってね。そんな時代から米相場から、お役の町になってしもた…」（補注16）

―蔵屋敷とか一杯あったようですから…

「それで…皆、追いやられた…立ち退きさされて…ほいで北へ北へとほいで…曾根崎新地と堂島と…そこで北の新地になったんです。それが歴史やいうて聞いてますけど。それでお女郎さんばっかりであまりにも…官僚的な…あの…お役所とか出来て、だから廃止になるんですよね」

―火事で焼けて…

「火事からでも店はありましたんですけど、そのうちに廃止になって(51)…あ…お女郎さんたちは…」

―なくなりますね

「はい…その時に芸妓さんだけは残そと…ということは、すごく取引の関係のときに努力をした。お役にたったそうです」

写真6　大阪高麗橋「吉兆」本店にて
（湯木貞一社長を囲んで。
右から梅十三氏、十三野氏、小琳氏）

補注13

「編集部　現役バリバリのときには、一日どれくらいお座敷に出ていたんですか？　梅十三　料亭さんを、五軒は回ってました。「花外楼」「つるや」「なだ万」「吉兆」、少し離れて「さか卯」と、みんな回って、寄せてもろたところによっては「次、下のお部屋へ」なんてこともあって。（中略）編集部　五つもお座敷を回るというのは、移動だけでも大変ですよね。　梅十三　私がまだ芸妓さんに出んと、姉のところへ来てたときは、輪タクがみな迎えに来てました」（史料⑤、七〇頁）「梅十三（中略）ある大阪が本社の会社の、いちばん最初の社長さんは、すごく踊りがお上手やったんです。しかも、お芝居やら、よう見てはるから、その真似しはるわけ。「保名」って、狂乱した男の人が蝶々につられて出てきはるような踊りを、私らの帯揚げやなんかを病鉢巻にして頭に巻いて、長袴の代わりに浴衣の袖のほうをはいたりして、いつも踊ってはりました。蝶々は紙で作ったのを箒につけて、空中にふわふわ飛ばすんですけど、その蝶々を、いつも「梅十三、お前やれ」って言われて、飛ばしてたんです。その踊りが本当に上手で、面白くて、洒落てました」（史料⑤、七二頁）「梅十三　そう、そう。私たちはお茶屋さんから声をかけていただくんです。昔は宴会の後の二次会を、お茶屋さんでされてたんです。二次会はお手元さん（招待する側の客）だけのことが多いから、くつろぎはるんですね。それで、三味線弾いたり、踊ったり、唄ったり。もちろん、料亭抜きで最初からお茶屋さんということもあります。会議の後で飲んだりとかね。　土屋　なるほど。それがお座敷あそびですね。料亭とお茶屋さんはどう違うんですか。　梅十三　料亭はお料理屋さん。宴会でお料理召し上がって、芸妓衆の踊り見て。あくまで主役はお料理。芸妓はお料理の引き立て役なんです。お茶屋さんはお料理はつくりません。仕出屋さんから取り寄せるんです。今は仕出屋さんが少なくなったんで、お茶屋さんも自分とこで、お料理つくっておられますけど、お茶屋さんは芸妓が主役になれるんです」（史料⑥、二〇〇五年九月五日）「梅十三　芸妓さん呼んで、お酒飲むところ。お茶屋さん行ったら丹前着てはるお客さん多かったですね。まずお風呂入って着替えていただくんです。夏なら浴衣。お料理屋さんで宴会ある時でも、お茶屋さんでお風呂入ってから出かけられました。「後で帰ってくるから」言うて。お茶屋さんで二次会しはるんです。東京からおみえになった偉い方が、お茶屋さんに泊まられることも多かったですね。会議終わって宴会して、そのままお泊りになるんです。今みたいにホテル多なかったから。　土屋　お茶屋を利用するのは、ほとんど経済界の人ですか。　梅十三　私の場合はね。ほとんど経済界の方のお座敷でした。政界や役所の方は少なかったですね。官官接待が問題になったけど、私はあまり呼んでいただいた記憶がないんです。出たてのころ、なんでお客さんみな帳面持ってはるんやろと不思議でした。会議してはるんですね。宴会でもよう仕事の話してはりました。私らがいても平気で。こんなことしゃべっていいんやろか思うようなことも。後で新聞見て、ああ、あの時のことが出てるいうの、ぎょうさんありました。　土屋　そのへんの話をちょろっと…　梅十三　それはダメ。ここ（おなかを押さえて）に収めて、お墓まで持っていきます。芸者は口が堅いのが一番。おしゃべりは嫌われます。新地で商売できまへん。お茶屋さんは各部屋が区切られてるでしょ。だから、商談や会社の会議に使いやすいんですね。私らは信用されてるから呼んでいただいてるのだし。社長が「今日のあの妓なあ」と一言いいはったら、終わりです。秘書さんがすぐお茶屋のおかあさんに電話して、もう二度と呼んでもらえません。（中略）よそのお客様の話ね。いつどこそこで誰々に会ったとか、どこそこの部屋に誰がきてはるとかね。それと、お金の話。特に食べ物とか着る物のこととかはね。

お米の値段知ってても、なんぼやとかいうたらあきません。所帯じみてくるから（中略）私らも新聞はよう読んでますよ。特に死亡欄と人事異動は絶対見とかな。でも、知ったかぶりをしてしゃべってはあきませんね（史料⑥、二〇〇五年九月六日）「梅十三　私が出た昭和二十年代のおわりごろは景気よくなかったんですけど、三、四年してえらいようなりましてねえ。神武景気いうんですか。毎晩、お座敷がありました。それも一晩に複数で。昭和三十年代が戦後の北新地の全盛時代でしょうね。それと、この前のバブル。（中略）梅十三　私の場合は糸関係。それと、お薬屋さん。薬品、化学関係ですね。あのころは毎晩宴会のはしごです。お座敷で踊り、踊ったら待たせてるタクシーに乗って、次の料亭へという具合で。一晩に五つ六つの宴会をかけもちするなんて、しょっちゅうでした。宴会が終わったら、お茶屋さんで二次会です。その後、さらにバーへ繰り出して。お客さんがそばにいて芸者に、「みんなついてこい」いうて、ぞろぞろと。（中略）梅十三　お花代つけてくれはります。（中略）昔はまたマージャンが多かったんです。二次会の後で。私らがメンバーに入るんですけど、これもお花代つけてくれはりますねん。（中略）第一、芸者の負けを取りはるお客さんおられませんわ。いったんは財布から出すんですよ。お客さんの「勉強代や」いう声が終わらんうちに、さっと元へ直してね。（中略）お正月最初のお座敷はね、料亭のおかみさんが私らにお年玉をくださいます。一人ずつぽち袋を背中に入れて。そうすると、お客さんも我も我もという感じで、同じようにお年玉を背中に入れてくれはるんです。帰ってから帯ほどく時の楽しさ。袋見て「ウァーツ」いうたり、「へー」いうたり。「ウァーツ」が二千円から三千円の袋。「へー」が百円札。大体千円ですね」（史料⑥、二〇〇五年九月七日）「土屋　芸能人とかスポーツ関係のお客さんはどうです。　梅十三　長谷川一夫さんにかわいがっていただきました。とても気さくな方でしたよ。（尾上）菊五郎劇団の方も楽しかったですね。（中略）お相撲さんでは横綱の栃錦さん。人柄がとってもよかった。日本舞踊を踊りはるんです。私たちの三味線で。粋でしたねえ。それと、千代ノ山さん（横綱）。この方は三味線で唄いはるんです。一中節を。太いかれた声でね、よかったですよ。お二人ともパッとご祝儀切って帰りはる。しゃれたお遊びしはりましたねえ。　土屋　確か千代ノ山は奥さんが大阪の料亭の娘さんでしたよね。　梅十三　そう、そう。花月のね。一中節いうのはね、古曲で、とっても難しい唄なんです。今、唄われる方、ほとんどおられません。　土屋　芸能人とか相撲取りは誰かに招待されて来るんですか。　梅十三　たいていそうですね。長谷川一夫さんは西川流（梅十三さんの踊りの流派）の先代の家元（西川鯉三郎）と親しくされてて、大阪でお仕事がある時は、必ず家元とご一緒してくださいました。菊五郎劇団はつる屋の先代ご主人がごひいきにしておられて、関西で公演がある時は、ごちそうしてあげはるんです。そこへ私たちを呼んでくださる。役者さんも、お相撲さんもおもしろかったですねえ。呼んでいただくの楽しみでした。会社にしろ、芸能界にしろ、相撲界にしろトップになるお方は、みなすばらしいもの持ってはります。そういう方たちのお座敷で、芸者もいい勉強させていただきました」（史料⑥、二〇〇五年九月八日）「土屋　花街で芸者さんに人気があるのは、どんな客ですか。（中略）梅十三　さあ、それは…。たとえば、「お芝居見に行っといで」いうて切符くれはるとか。しかも、お花つけて。ご本人はおこしにならないで、芸者だけで行きます。昔は芝居茶屋があって、そこへ行くと、座席まで案内して、お弁当持ってきてくれはるんです。毎月、お芝居見せてもろうてましたよ。きものこしらえてくれはるお客さんもおられました。十人ぐらいの芸者にパーッと。ただじゃん

じゃん遣うんではなくて、きれいに遣いはる方がおモテになります。（中略）芸者はお客さんのこと詳しく聞いたらいかんのです。だから、お座敷での話や雰囲気から知っていくんです。私たちにまでこまかい心遣いしてくれはるお方は、大体偉ろうなられます」（史料⑥、二〇〇五年九月九日）

補注14「（森つた子さん）「新地は旦那衆が遊ぶとこだしてん。昔から一見さんはせん。南は大番頭はんや中番頭さんが気楽に遊べる所だしてん」（史料⑦、二〇〇八年六月二〇日）

補注15「梅十三　株屋さんはねえ、あまりお座敷ではお遊びにならないんです。バーが多い。建築屋さんはバブルのころ多かった。ゼネコンさん、セメント屋さん、運送屋さん。建築屋さんの宴会はにぎやかでしたよ。バス借り切って、有馬温泉へもよう行きました。遠い昔のような気がします」（史料⑥、二〇〇五年九月七日）

補注16「町人を客筋とした堂島新地に対し、曾根崎新地は中之島周辺に集中していた各藩の蔵屋敷のお武家や堂島米市場の仲買を大旦那とし、武家の機嫌を取るのに長じていたとされる。新橋と並び称され、高度成長期には、京都・祇園から芸妓が手伝いに来ていた北新地は、数多の名妓を輩出した」（史料⑦、二〇〇八年八月二九日）

四、図版の説明

大阪の花街を含む街並みについては、堀江地域について水知悠之介他編『なつかしの昭和　堀江戦前住宅地図』(52)が刊行され、店舗配置なども見事に復元された。北新地に関しては、中村平之助『思い出の記　明治時代の堂島・曾根崎』(53)があり、一九〇七年（明治四〇）頃の記憶が絵図上に示される。さらに吉田真日出他編『堂島物語』(54)は、一九二二年（大正一一）から一九二七年（昭和二）頃の堂島地区を詳細に復元し、極めて有益である。しかし、北新地（曾根崎新地）の街並み復原は、これまで手つかずのままであった。

そこで本稿では、前節に掲げた聞取り記録や文献史料に登場する店舗、施設、通称の地名等の位置を示す略地図（図1）、北新地（曾根崎新地一丁目～三丁目）内の席貸（茶屋）、芸妓扱席、一般店舗等の所在地を示す略地図（図2の1～5）を作成し、『浪花踊番付』に付された「芸妓扱店」の案内図の翻刻（図3の1～2）、北新地席貸等の写真集（付図）とともに文末に掲げた。各図の典拠などを次に示そう。

〔図1〕大正末から昭和初年にかけての北新地を中心とする地域の概略図。「大阪詳細図」(55)（一九三一年（昭和六）作成）を元に、新たに図面を起し、竹本氏、田村氏、西川氏の証言に現れる店舗等で、証言や『堂島物語』等で位置が判明するものを示した。また聞取り調査とは別に、西川氏のご教示を受けた箇所も多い（戦後、戦前と同位置に店舗が再建された場合など）。なお『堂島物語』は、堂島小学校同窓生による労作であるが、曾根崎新地については情報が殆ど得られなかった由である(56)。

〔図2〕『大阪地籍地図　北区』（一九一一年（明治四四））(57)を原図に、新たに北新地の図面を起し、地番を記入した後、店舗名等の必要事項を傍書した。店舗は、『大大阪営業名鑑』（一九二二年（大正一一））(58)および『大阪商工名録』（一九三七年）(59)から、地番が明記されるものを収集し、所在地番、店舗名、業種等の表で示した。業種については出典に、「席貸」「貸座敷」の用語上の混乱が認めら

れるが、本図では後者に統一した。最右欄の「大」「昭」「〇」はそれぞれ、『大大阪営業名鑑』、『大阪商工名録』、両書に共通してみえる店舗である。典拠のうち、『大阪地籍地図』と『大大阪営業名鑑』は一一年を隔てた刊行であり、『大阪商工名録』は後者よりさらに一五年後の刊行なので、本図は街並み復元としては不確実な要素を含んでいる。さらに、証言の年代と合致しない箇所もあると思われる。将来、証言等と年代の近い地図や店舗一覧を見ることができれば、逐次改訂していきたい。なお、『大阪地籍地図』は税務署作成の土地台帳であり、土地各筆の面積は明記されるが縮尺が示されない。

〔図3〕一九二二年における、北新地の芸妓扱店ならびに席貸（茶屋）の配置を示す図面の翻刻である。詳細は付記した「凡例」を参照されたい。

〔付図〕北新地の席貸六軒、小売店舗二軒、洋食店一軒の写真を掲げた。出典は『北陽浪花踊番付』である(60)。

五、むすびにかえて

本稿を終えるにあたり、聞取り調査記録および文献史料から、筆者らが北新地について知りえたことを纏めておきたい。証言者四名のうち、北新地を直接知る方は三名（竹本住大夫氏、田村富子氏、西川梅十三氏）、直接は知らないが北新地の文献に詳しい方が一名（肥田晧三氏）であった。

竹本氏は、実母・養母（実母の姉）ともに北新地の元芸妓で、実父は文楽の元三味線方、養父は文楽の大夫である。北新地に隣接する堂島船大工町に生まれ、一一歳まで北新地で育った。実家は煙草屋から旅館業に転じ、養母は妹の煙草屋を引き継いで夫を助けた。竹本氏の家族・親族だけでなく、当時の北新地界隈には、文楽関係はじめ諸芸の師匠や俳優たちが多数居住しており、彼らは（元）芸妓の家族であったり、花街の経営（席貸＝茶屋）に携わったりする者が多かったようである。また北新地には、芸妓の芸を目的に集う遊客だけでなく、芸事を習う「素人」も集まってきた。このことは、北新地が芸能を媒介に大阪の街にとけ込み、市民にある程度開かれた場であったことを示唆している。茶屋は「一見さんお断り」だが、市民は北陽演舞場の「浪花踊」で芸妓の芸に接することが出来た。

田村氏と西川氏は北新地の元芸妓であり、田村氏への聞取り調査にも西川氏が同席され、一緒に語られることも多かったので、纏めて記したい。西川氏からは、街並み復原に止まらない情報も多く得られた。特に大切なことは、茶屋が会議や商談の場として日常的に使われていた事実である。茶屋の座敷は個室であっただけでなく、芸妓は口が堅いので信用も厚く、重要事項の取り決めには格好の場であった。戦後においても同様である。「すごく取引の関係のときに努力をした、お役にたったそうです」という西川氏の証言は、その場に同席した者の言葉として重みを持っている。また北と南の客層の違い、芸達者な客（企業経営者）の存在、芸妓の屋形（家）が永楽町や堂島近辺に集中し、芸妓はそこから扱い席や茶屋に通ったなどという証言も貴重である。ちなみに田村氏の父は著名な喜劇役者であり、堂島船大工町に家があった。

肥田氏の報告は異色である。「実際には北新地のことは何一つ知りません」と言われながら、北新地に関する多数の文献を縦横に紹介して名講義の如く、書誌学者の面目躍如である。近世における北新地を題材とする洒落本の盛行は、北新地への関心の高さを物がたり、近代にかけては花街の年中行事や神社（天満宮、住吉大社）との密接な関係、京阪の一流日本画家との関係、さらに戦後における行事の保存運動などにも言及される。総じて、花街と大阪の文化、社会との深い関係を示唆する証言であり、花街に関する学際研究の必要を痛感した。街並みに関わっては、井路川と樋の橋の証言がある。なお、証言中で言及された『花柳仙郷』『浪花の華』の二冊は、明治期の各花街の実態とその変化を探る貴重な史料と思われ、筆者らは分析を始めている。

「はじめに」で述べたように、筆者らは北新地を中心とする大阪の花街が、商取引のみならず市民諸階層のネットワーク形成の場となり、都市大阪の発展に寄与したと考えるものである。本稿はこれを解明するには至らなかったが、その第一歩として街並み復元を通して「北新地という場」を考えた結果、前記のような知見を得ることが出来た。花街は近代大阪においても、「閉じられた空間」ではない。しかしその開かれ方には、年代や地域による相違があり、北新地の場合は「伝統芸能」を媒介とする社会との繋がりが主軸であったように思われる。今後はこの知見を踏まえて、近代大阪における花街の社会的機能について追究したい。

注

（1）塚田孝『身分制社会と市民社会』（柏書房、一九九二）、同「近世身分制と周縁社会」（東京大学出版会、一九九七）、吉田伸之『身分的周縁と社会＝文化構造』（部落問題研究所、二〇〇三）。

（2）吉田伸之「遊廓社会」（塚田孝編『身分的周縁と近世社会4都市の周縁に生きる』、吉川弘文館、二〇〇六）。

（3）佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊廓社会』①「三都と地方都市」（吉川弘文館、二〇一三）、同編『同』②「近世から近代へ」（同、二〇一四）。

（4）広川禎秀編『近代大阪の行政・社会・経済』（青木書店、一九九八）。

（5）広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』（部落問題研究所、二〇〇九）。

（6）佐賀朝氏の一連の研究。近年のものとしては、佐賀「近代巨大都市の社会構造―明治期大阪の都市内地域」（佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6都市社会史』、山川出版社、二〇〇一）、同「居留地付き遊郭―東京と大阪」（注（3）『シリーズ遊廓社会』②）。

（7）京都花街については、歴史地理学、文化人類学、観光学、芸能史他の研究に一定の成果があるが、花街と社会との具体的関係を探り、その社会的機能を問う姿勢は乏しい。

（8）佐藤駒次郎「北新地の変遷」（『上方』第五一号、一九三五）には、「彼の北区大火で廓は焦土と化し、復興に全力をそゝぎ一方では遊廓廃止廃娼等の問題に出会ひ現取締大西君以下役員等もさんざん努力の結果、娼妓を廃し東京式の席貸に組織を改め、やうやく営業を続けることを許された」とある。

（9）水知悠之介『近代大阪と堀江・新町』（新風書房、二〇一一）。

（10）笠井津加佐・佐藤恵「浪花踊に関する史料調査：佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）」（金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間

社会環境研究』第二八号、二〇一四）、同「同（第七回～第十五回）」（『同』第二九号、二〇一五）、同「同（第十六回～第二三回）」（『同』第三〇号、二〇一五）、笠井津加佐「「北陽浪花踊」の特徴への試論：作歌者、詞章構成、詞章と視覚表現との関係をめぐって」（『同』三一号、二〇一六）、笠井津加佐・笠井純一「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」（『同』第三二号、二〇一六）。なお、笠井津加佐・笠井純一（二〇一六）は、二〇一五年一一月五日、東洋音楽学会大会（於東京藝術大学）において連名で発表したものである。

(11) 戦前期の大阪において、雑誌『上方』を編集・刊行し続けた南木芳太郎は、その第三八号（一九三三）巻末のコラム「編輯者より」のなかで、「上方の遊廓は上方に繁栄を齎した主動力」と記している。江戸時代、北新地に近接する堂島には諸藩の蔵屋敷が林立していたが、武士と米穀商人との交渉・交流の場は北新地などの花街であった。近代の商取引にも、「お振舞芸妓」（「振舞」とは接待のこと）の存在が不可欠であったようである。また、清元を核とする各界人士のネットワークを示す史料があり、近々紹介する予定であるが、この関係も花街を中心に形成された可能性が高い。

(12) 曾根崎新地一丁目四九番地にあった玉井煙草店。図1参照。

(13) 喜劇役者・脚本家。一八七七年、大阪府下生れ。本名は和田久一。大阪に丁稚奉公に出たが、歌舞伎役者の門に入り中村珊之助の名で初舞台。中村時蔵の弟子：中村時代とコンビを組み、五郎・十郎と改名して、一九〇四年に「曾我廼家兄弟劇」を立ち上げた。一九一三年、十郎と袂を分ち、渡欧して演劇を学んだ後、「五郎劇」を結成した。一九三六年には所得番付一位となり、喉頭ガンで声を失ってからも舞台に立ち続けた。一九四八年一一月歿。

(14) 一八八四年から、文楽座は御霊神社の境内に設けられたが、一九二六年の火災で焼失。

(15) 一九三〇年一月、松竹によって四ツ橋近辺の佐野屋橋南詰（旧近松座の地）に建てられた劇場。洋風建築で椅子席八五〇を設けたが、一九四五年三月の大阪大空襲で焼失。

(16) 四代目。文楽の三味線方。一八八二年一月、大阪生れ。本名、土肥原伊太郎。一九〇〇年、野澤喜左衛門に入門し、勝太郎を名乗る。一九一一年、勝市襲名。一九三一年一月、五〇歳で没。曾根崎新地一丁目三二番地で、席貸「かつや」を営んだ。

(17) 四代目野澤錦糸。文楽の三味線方。一九一七年一〇月、大阪生まれ。本名、金谷一雄。実父である三代目錦糸から手ほどきを受ける。鶴澤綱造、野澤勝平（野澤喜左衛門）に師事し、一九三一年初舞台。一九四二年、錦糸襲名。一九八八年、人間国宝。同年一一月、七一歳で歿。

(18) 曾根崎新地一丁目二六番地にあった席貸。

(19) 俳優。一八九五年一二月鳥取市生れ。一九一一年、東京美術学校選科中退。川上貞奴一座を経て、一九二三年帝国キネマに入社。その後、日活、松竹、帝国キネマ、新興京都等に席を置いた。歿年未詳。曾根崎新地一丁目二九番地に席貸「松本」があり、『北陽浪花踊番付』（一九二二、二三年）に記されるが、一九二八年以降は記されない（一九二四～二七年は簡易な番付しか残らず、追跡できない）。

(20) 吉本興行経営の寄席。もとは佐藤卯之助経営の寄席「永楽席」であった。注（44）及び図1参照。

(21) 漫才師の横山エンタツ（一八九六年四月～一九七一年三月）と花菱アチャコ（一八九七年七月～一九七四年七月）のコンビ。一九三〇年以降、吉本興業でコンビを組み、背広服で舞台をつとめ人気を博したが、一九三四年、アチャコが中耳炎を患ったの機にコンビを解消した。

(22) 噺家。一八八四年、大阪生れ。本名は竹内梅之助。一九〇四年、笑福

亭枝鶴（後の四代目松鶴）に入門、光鶴（二代目）を名乗る。三友派、寿々（女）会、新桂派を経て三友派に戻り、一九一八年二代目枝鶴を襲名。一九二一年に吉本興業に入り、一九三五年松鶴を襲名。一九五〇年七月、六五歳で歿。

(23) 三代目中村梅玉。歌舞伎役者。一八七五年一月、大阪生れ。二代目中村梅玉の養子となり、一八八〇年初舞台。一九〇一年以降、初代中村鴈治郎のもとで修業。一九〇七年、中村福助（四代目）襲名。女形として鴈治郎の相手方をつとめた。鴈治郎歿後の一九三五年、中座で梅玉を襲名。関西歌舞伎界の長老であった。一九五三年三月歿。本名は笹木（ささき）伊之助。

(24) 中村魁車。歌舞伎役者。一八七五年一二月生れ。本名は桂榮太郎。初代中村鴈治郎の部屋子となり、一八八三年初舞台（中村成太郎）。市川左団次（二代目）のもとで修業の後、一九二四年、贔屓筋の富岡鐵齋がつけた「魁車」と改名。女形として鴈治郎の相手方をつとめ、梅玉と競いながら芸を磨いた。鴈治郎歿後は関西歌舞伎界の長老として、幅広い役をこなした。一九四五年三月の大阪大空襲により、南区の自宅防空壕で孫と共に焼死した。

(25) 『北陽浪花踊番付』（一九三〇、三一年）の広告に「堂島美人座」がみえるが、所在地番は未詳。

(26) 正式名称は「曾根崎川」。大江橋北詰の少し東寄り（堂ビル裏側辺り）で堂島川から分流し、北の新地を弓なりに抜けた後、堂島大橋辺りで堂島川に合流していた。川幅は一二～一四メートルほどで、大橋に近づくと二〇メートルを超えていたともいう。北の大火（一九〇九年七月三一日）の後、一九一二年に東半分が、一九二四年に西半分が瓦礫で埋め立てられた（森つた子『蔦のかけはし』、二〇〇二年による）。一九一一年『大阪地籍地図』（注（57）参照）によれば、曾根崎新地一丁目～三丁目と堂島裏一丁目～二丁目（後、堂島上一丁目～三丁目）を隔てて流れ、「桜橋」「助成橋」等が架けられている。

(27) 一八六八年から一八九九年まで、川口（安治川と木津川の分流点）には居留地が設けられ、外国人貿易商館や行政機関庁舎が建ち、大正末年頃まで大阪の政治・経済の要であった。中華料理店も多かった。

(28) 『北陽浪花踊番付』（一九三一年）に「中華楼」の広告がみえるが、所在地は未詳。

(29) 北新地の銭湯。曾根崎新地二丁目六番地にあった。図1参照。

(30) 和菓子店。『北陽浪花踊番付』（一九二八年）に広告がある。大正末年の経営者は平田真次郎。現在、曾根崎新地一丁目二の三〇に「柳月堂ビル」が建ち、飲食店などテナントが入る。戦前の地番では、同二丁目六の辺りに相当する。図1参照。

(31) 北新地にあった東京流鰻屋・鮮魚料理屋。『北陽浪花踊番付』には、しばしば広告を出している。鮓店、自動車部なども併設し、本店は曾根崎永楽町あったが、地番は未詳。但し現在、曾根崎新地一丁目一の二九に「ニュー菱冨ビル」が建ち、一階に洋食「菱冨」が入る。また同一丁目九の六には「菱冨ビル」があり、菓子店「いなば播七」が入っている。

(32) 花柳壽魁。日本舞踊家。一九七六年九月、大蔵から壽魁と改名。二〇一三年三月、八五歳で歿。本名森昭（もり あきら）。曾根崎新地一丁目五の七の森ビルで葬儀が行われた。森ビルは、江戸期から続いた席貸「森平」（もりへい）の跡地に建てられたビルで、ここで姉の森つた子（一九二二年生れ）が「蔦」を、弟の昭が「森平」を営んだ（共に料理屋）。戦前の地番は曾根崎新地二丁目三四番地（森つた子注（26）前掲書による）。

(33) 堂島上通二丁目にあったすき焼き屋。『北陽浪花踊番付』（一九二八年）

には、「本みやき」の名で広告を出す。図1参照。

(34) 曾根崎上四丁目にある洋食店。もと北陽軒と称し、家原ハツ氏(北新地「鶴太良」大女将)の祖父が経営する洋食屋であったが、一九二七年にスエヒロの初代に譲ったという(堂島連合振興町会編『堂島 千四百年の歴史』、二〇一六、による。図1及び付図の北陽軒写真を参照)。

(35) 北新地の鶏肉料理屋。曾根崎新地二丁目二四番地の三にあった。『北陽浪花踊番付』には、頻繁に広告を出している。図1参照。

(36) 北新地の鶏肉料理屋。『北陽浪花踊番付』(一九三二、三三年)に広告を出す。図1参照。

(37) 堂島小学校は一八九九年以降堂島船大工町に立地し、竹本住大夫氏生家:廣谷家の隣地であった。この場所は養家:岸本家からも近く、御堂筋(大江橋筋市電)を渡るだけで通学できたはずである。しかし同校は一九二九年、運動場狭隘の故をもって堂島浜通二丁目に移転し、一九二四年生まれの竹本氏が通学するには、電車道二本を越えねばならなくなった。図1参照。

(38) 堂島船大工町九の六番地にあった旅館。大正末年の経営者は廣谷新太郎(竹本住大夫氏の実父)。

(39) 上清とも書く。曾根崎新地二丁目一二九番地にあった料理屋。大正末年の経営者は上野清蔵。『北陽浪花踊番付』に頻繁に広告を出している。

(40) 曾根崎永楽町にあった料理屋。(株)谷安組のホームページ(taniyasu.co.jp/history_of_us/index.html)に掲げられた「昭和八年頃の北新地」図にみえ、花月倶楽部の西に位置する。図1参照。

(41) 竹本住大夫氏の記憶によれば、老松座の大衆席は十五銭ぐらい、子どもは五銭であったという。

(42) 江戸時代から続いた北新地席貸の一つ。曾根崎新地二丁目一一三番地に所在。大正末年の経営者は「伊藤槌之助」であり、同一丁目九番地で「平鹿洋酒店」も営んでいた。北陽浪花踊の番付には、平鹿および同洋酒店の広告写真(外観および内部)が掲載されている。

(43) 北新地席貸の一つ。北陽浪花踊の番付に、外観および内部の広告写真が掲載される(付図参照)。北新地の「芸の虫」と言われた佐藤くにの娘:神崎円(かんざきえん、元芸妓高田屋小金、日本舞踊神崎流の創始者)の養家でもあった(佐藤くに「曾根崎夜話(一)」『上方』第二八号、一九三三による)。『南木芳太郎日記』(大阪市史編纂所所蔵)にもしばしば登場し、ここで上方舞の会が開かれたことが分る。

(44) 正確には佐藤恵(花柳禄美之)氏の曽祖父である佐藤卯之助。曾根崎永楽町にあった寄席「永楽館」の館主だったが、吉本セイに売却した。その子が佐藤駒次郎で、北新地の芸妓取扱席「永楽席」(曾根崎新地一丁目二二番地)の経営者。北新地の技芸部長として、大西熊吉(北新地取締、「大西席」経営者、大阪府会議員)を助け、「北陽浪花踊」の発展に寄与した。駒次郎は『南木芳太郎日記』にも頻繁に登場し、南木と共に大阪伝統芸能の保存に努めた様子がうかがえる。「浪花踊」関係資料を白井松次郎(松竹社長)の別宅に疎開させ、空襲から守り抜いた。

(45) 曾根崎永楽町の通りの俗称。下原とも。図1参照。

(46) 芸妓扱店の大西席。曾根崎新地二丁目四六番地にあった。注(44)参照。

(47) 毎日新聞社の裏通りにあった牧野医院。『堂島物語』(注(54)参照)一〇二頁及び図1参照。

(48) 薬師堂。毎日新聞社裏通りにあった。図1参照。

(49) 「貞享元年(一六八四)からの曾根崎川改修に伴い、宝永五年(一七〇八)新地が成立した。(中略)蜆川を挟んで両岸は堂島・曾根崎両新地の茶屋が並び、川を屋形船・飲食の船が往来した」(「曾根崎新地」『大阪府の地名』I、平凡社、一九八六)。

(50) 「元禄元年(一六八八)開発された(中略)公認の新町遊廓に対して格

式は落ちるが、親しまれたようである。（中略）元禄一〇年一―二丁目辺りに米市場が移転してからは曾根崎新地にその中心が移っていったが、それでも蜆川に面した河岸には茶屋が立並んでいた」（「堂島新地」、注（49）前掲書）。

（51）一九〇九年の「北の大火」で、両新地は全焼した。注（8）参照。

（52）特定非営利活動法人なにわ堀江1500（代表：水知悠之介）編『なつかしの昭和 堀江戦前住宅地図改訂版』（新風書房、二〇〇八）。

（53）中村平之助『思い出の記 明治時代の堂島・曾根崎』（ビューティー大阪、一九八七）。

（54）吉田真日出・勝井敏夫編『堂島物語』（堂島遊園運営委員会、一九八六）。

（55）清水晴夫・寺内信編『明治前期・昭和初期 大阪都市地図』（柏書房、一九九五）所収。

（56）同書九一頁下段に次の記述がある。「一番困るのは新地本通り及び以北であり此地域に住んだ同級生は洵に尠く、又お茶屋方面の情報は入手の方法がない。但し鮓岩の神澤福太郎氏に依れば御茶屋及び料理屋の名前と位置丈けなら当時鮓岩の顧客関係は大體判るとの事なれ共これでは単純なる地図のみが制作可能で物語りにならない。今堂島小学校の事業とす可く三宅氏が地図を作成中と聞くので寧ろ北（此カ）の方がより正確であらふ。従而書き様もなき曾根崎新地に就ては此処では何も書かない」。

（57）宮本又郎監修・名越なつ紀解題『地籍台帳・地籍地図〔大阪〕一九一一（明治四四）年』第四巻　地図編　大阪市北区及び接続町村（柏書房、二〇〇九）。大阪府立中之島図書館大阪資料・古典籍室において教示を受けた。

（58）秦重吉編『大大阪営業名鑑』（同発行社、一九二六）。

（59）大阪商業会議所編『大阪商工名録』（同発行所、一九三七）。

（60）呉服太物店の写真は第三回『北陽浪花踊番付』（大阪府立中之島図書館蔵、一九一七年）による。その他の写真は『北陽浪花踊番付』（佐藤恵氏蔵、一九二〇年）による。

調査参加者の略歴

竹本住大夫（岸本欣一）氏

七世竹本住大夫（しちせい・たけもとすみたゆう）。文楽大夫。代表作は、『伊賀越道中双六』「沼津の段」、『仮名手本忠臣蔵』「山科閑居の段」、『菅原伝授手習鑑』「寺子屋の段」「桜丸切腹の段」など。

（略歴）

一九二四（大正一三）年　大阪に生まれる。

一九四四（昭和一九）年　日本大学大阪専門学校（現近畿大学）を卒業。後、徴兵。

一九四六（昭和二一）年　二世豊竹古靭大夫に入門。

一九六〇（昭和三五）年　九世竹本文字大夫を襲名。

一九八五（昭和六〇）年　七世竹本住大夫を襲名。

一九八九（平成　元）年　重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。

二〇〇二（平成一四）年　日本芸術院会員に任命。

二〇〇五（平成一七）年　文化功労者。

二〇〇八（平成二〇）年　フランス芸術文化勲章コマンドゥール叙勲。

二〇一四（平成二六）年　文化勲章受章。

二〇一五（平成二七）年　近畿大学名誉博士学位授与。

二〇一七（平成二九）年　大阪市立大学特別客員教授任命。

田村富子氏

芸妓時代は、梅玉（うめたま）の名前で大西席に所属する。舞台や座敷で、花柳流の立方として活躍したのち、長く清元（三味線）や小唄（三味線）などの地方をつとめた。清元延月輔（のぶつきすけ）、和敬糸女玉（わけい・いとたまめ）。

（略歴）一九二四（大正一三）年　大阪に生まれる。父は喜劇役者の田村楽太（らくた）。

一九三九（昭和一四）年　数え年十六歳で芸妓になる（大西席）。この間、第三八回浪花をどり（一九六九年、地方（清元および小唄、三味線））などに出演。

一九九五（平成　七）年　数え年七十二歳で妓籍を辞す。

肥田皓三氏

専門は書誌学、近世文学。著書『上方学芸史叢攷』（青裳堂書店）、『上方風雅信』（人文書院）、『近世子どもの絵本集・上方篇』（岩波書店、毎日出版文化賞特別賞）。

（略歴）一九三〇（昭和　五）年　大阪・島之内に生まれる。

一九五三（昭和二八）年　大阪府立高津高校、病気のため中途退学。

一九六八（昭和四三）年　大阪府立図書館非常勤嘱託、のち関西大学図書館非常勤嘱託、関西大文学部非常勤講師を経て、

一九八四（昭和五九）年　関西大学文学部教授に就任。

一九九〇（平成　二）年　退職。

西川梅十三（奥川君子）氏

北新地芸妓・梅十三（うめとみ）として活躍し、妓籍を辞した後は西川流師範として後進の指導にあたる。大阪、東京、名古屋他で踊の会に出演するだけでなく、「素人さんのお師匠さん」では醸し出せない花街の色香と芸を伝える数少ない師匠であり、北新地の芸妓のみならず、若手を含む多数の落語家も指導する。また、「古き良き北新地」を今日に伝える「語りべ」として、大阪各所で講演している。踊りのほか、清元、小唄でも活躍。清元延美春（のぶみはる）。田村てる幸（ゆき）。

（略歴）一九三八（昭和一三）年　京都に生まれる。

一九四七（昭和二二）年　隣人であり、西川流日本舞踊師匠であった西川霞中（戦災で北新地から京都に移住）の娘、葭江に入門。

一九五一（昭和二六）年　西川鯉三郎の子役をつとめる。新作もの「朝顔日記」里の子。

一九五三（昭和二八）年　霞中とともに北新地へ赴き、梅さくの妹分となり、梅十三の名で芸妓となる（平田席。最初の三年間は舞妓をつとめる）。西川流の名取りとなる。

一九五七（昭和三二）年　妓籍を辞す。

一九九九（平成一一）年　NHK「邦楽のひととき」出演、清元「今様須磨の写絵下段」、浄瑠璃。

二〇〇九（平成二一）年　NHK「芸能花舞台」出演、上方舞「萬歳」。

二〇一〇（平成二二）年　NHK「邦楽のひととき」出演、清元「十六夜清心」、浄瑠璃。

二〇一一（平成二三）年　NHK「にっぽんの芸能」出演、舞踊清元

二〇一三（平成二五）年

「雁金」。

二〇一六（平成二八）年　ＮＨＫ「邦楽のひととき」出演、小唄「青いガス燈」「男がようて」「今朝の別れ」「おーい山王さん」、唄。

謝辞　竹本住大夫氏、田村富子氏、肥田晧三氏、西川梅十三氏の四方には、ご多忙の中、聞取り調査に応じてくださっただけでなく、原稿の確認などで何度もお手を煩わせたにも関わらず、「大阪のためなら」と、心よくご協力くださいました。衷心から深謝の意を捧げます。また、情報や資料の提供などで、特定非営利活動法人 人形浄瑠璃文楽座、本学准教授 上田長生氏、大阪市史編纂所長 堀田暁生氏、同所員 古川武志氏、旭堂南陵氏、大阪府立中之島図書館大阪資料・古典籍課総括主査 梶原修氏はじめ司書の方々、大阪市立中央図書館、関西大学図書館、大阪高麗橋吉兆、北新地鶴太良、佐藤恵氏（順不同）には、一方ならぬお世話になりました。あわせて深謝の意を表します。

図1 戦前期の北新地を中心とする概略図（大正末～昭和初年）

図 2-1 曽根崎新地 1 丁目の店舗

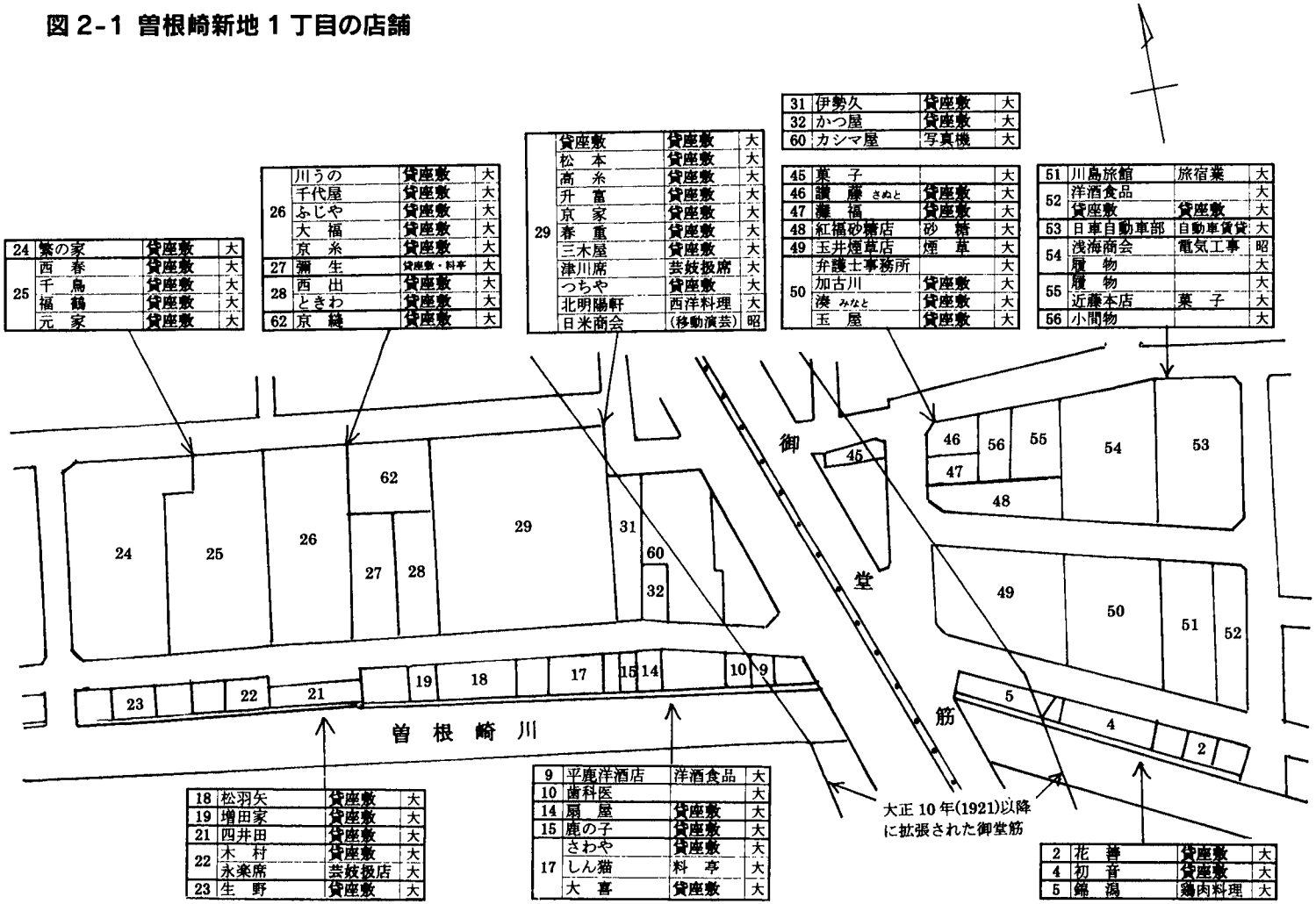


図 2-2　曽根崎新地２丁目の店舗（東側）

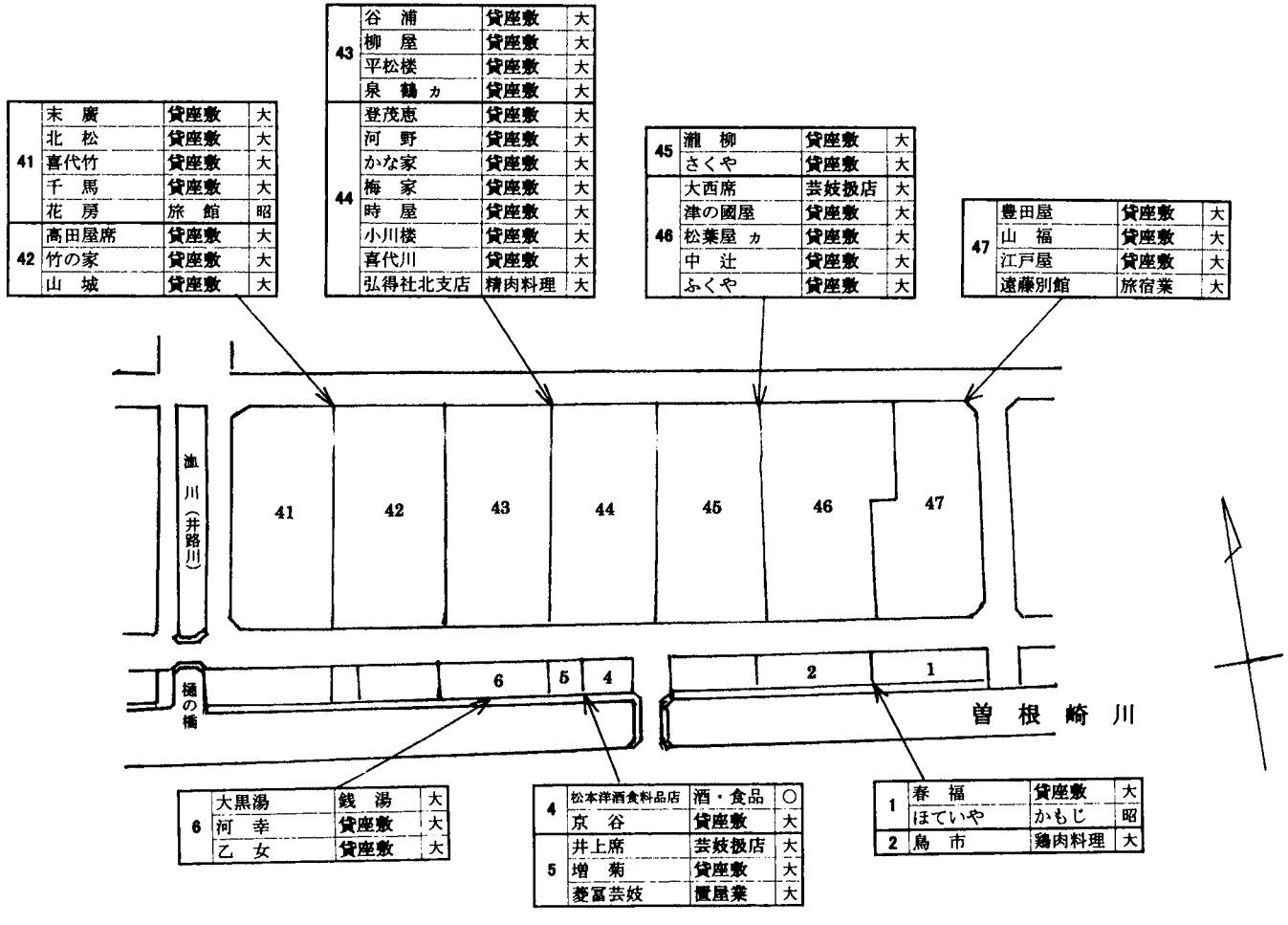
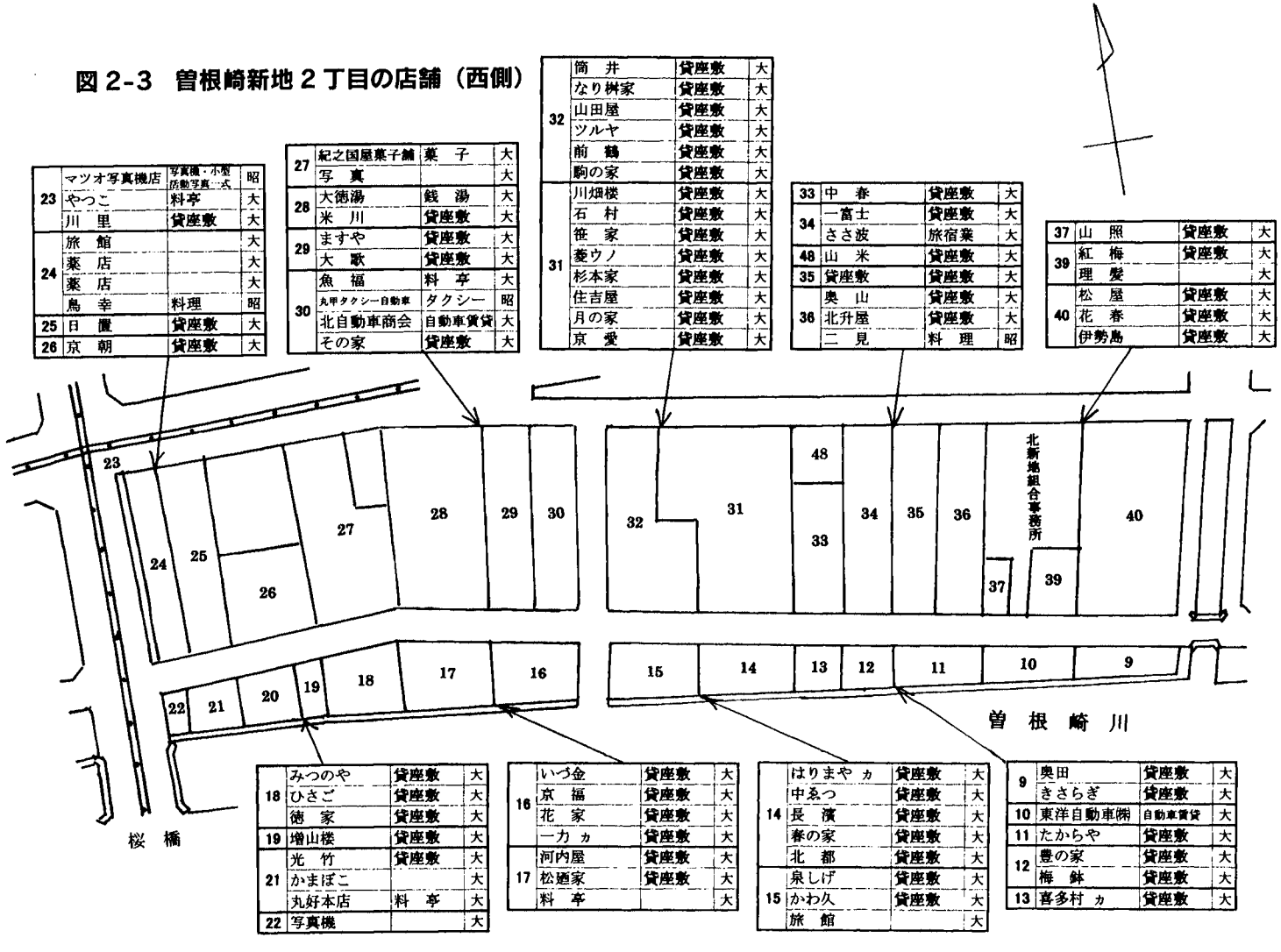


図 2-3　曽根崎新地２丁目の店舗（西側）



23	マツオ写真機店	写真機・小型活動写真一式	昭
	やっこ	料亭	大
	川里	貸座敷	大
24	旅館		大
	薬店		大
	薬店		大
	鳥幸	料理	昭
25	日置	貸座敷	大
26	京朝	貸座敷	大

27	紀之国屋菓子舗	菓子	大
	写真		大
28	大徳湯	銭湯	大
	米川	貸座敷	大
29	ますや	貸座敷	大
	大歌	貸座敷	大
30	魚福	料亭	大
	丸甲タクシー自動車	タクシー	昭
	北自動車商会	自動車賃貸	大
	その家	貸座敷	大

32	筒井	貸座敷	大
	なり桝家	貸座敷	大
	山田屋	貸座敷	大
	ツルヤ	貸座敷	大
	前鶴	貸座敷	大
	駒の家	貸座敷	大
31	川畑楼	貸座敷	大
	石村	貸座敷	大
	笹家	貸座敷	大
	菱ウノ	貸座敷	大
	杉本家	貸座敷	大
	住吉屋	貸座敷	大
	月の家	貸座敷	大
	京愛	貸座敷	大

33	中春	貸座敷	大
34	一富士	貸座敷	大
	ささ波	旅宿業	大
48	山米	貸座敷	大
35	貸座敷	貸座敷	大
36	奥山	貸座敷	大
	北升屋	貸座敷	大
	二見	料理	昭

37	山照	貸座敷	大
39	紅梅	貸座敷	大
	理髪		大
40	松屋	貸座敷	大
	花春	貸座敷	大
	伊勢島	貸座敷	大

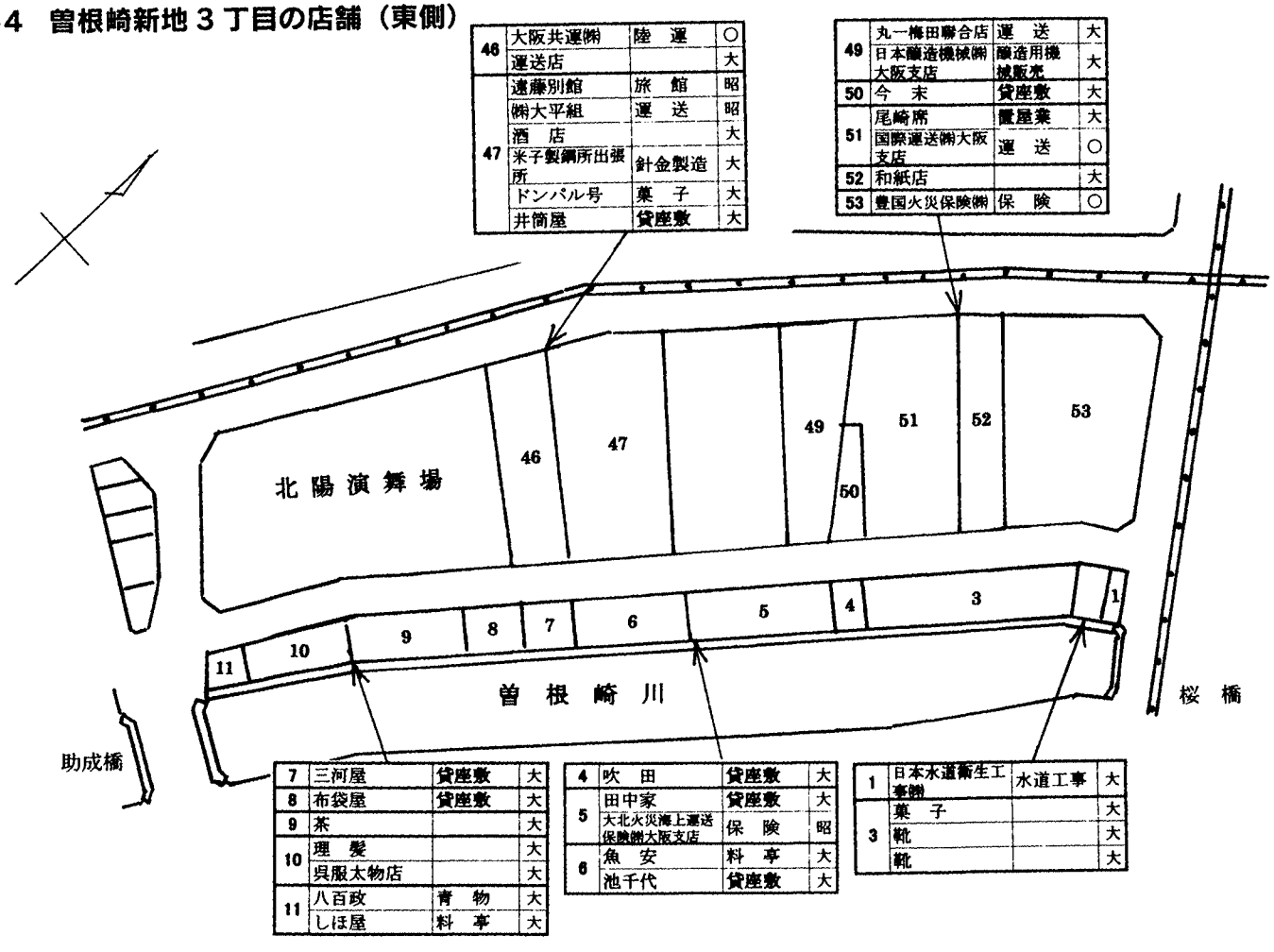
18	みつのや	貸座敷	大
	ひさご	貸座敷	大
	徳家	貸座敷	大
19	増山楼	貸座敷	大
21	光竹	貸座敷	大
	かまぼこ		大
	丸好本店	料亭	大
22	写真機		大

16	いづ金	貸座敷	大
	京福	貸座敷	大
	花家	貸座敷	大
	一力ヵ	貸座敷	大
17	河内屋	貸座敷	大
	松廼家	貸座敷	大
	料亭		大

14	はりまやヵ	貸座敷	大
	中ゑつ	貸座敷	大
	長濱	貸座敷	大
	春の家	貸座敷	大
	北都	貸座敷	大
15	泉しげ	貸座敷	大
	かわ久	貸座敷	大
	旅館		大

9	奥田	貸座敷	大
	きさらぎ	貸座敷	大
10	東洋自動車㈱	自動車賃貸	大
11	たからや	貸座敷	大
12	豊の家	貸座敷	大
	梅鉢	貸座敷	大
13	喜多村ヵ	貸座敷	大

図 2-4　曽根崎新地３丁目の店舗（東側）



46	大阪共運㈱	陸　運	○
	運送店		大
47	遠藤別館	旅　館	昭
	㈱大平組	運　送	昭
	酒　店		大
	米子製鋼所出張所	針金製造	大
	ドンパル号	菓　子	大
	井筒屋	貸座敷	大

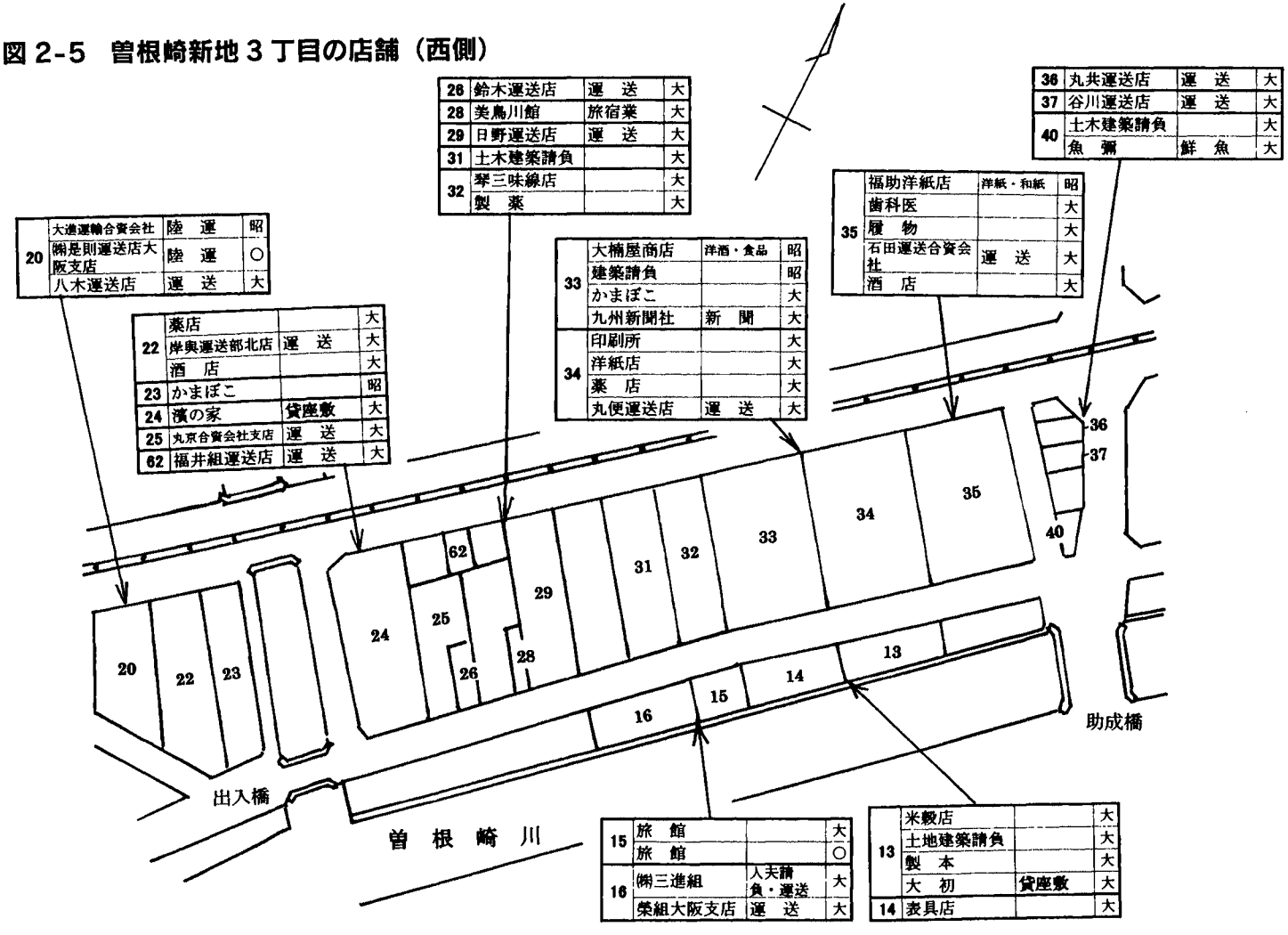
49	丸一梅田聯合店	運　送	大
	日本醸造機械㈱大阪支店	醸造用機械販売	大
50	今　末	貸座敷	大
51	尾崎席	置屋業	大
	国際運送㈱大阪支店	運　送	○
52	和紙店		大
53	豊国火災保険㈱	保　険	○

7	三河屋	貸座敷	大
8	布袋屋	貸座敷	大
9	茶		大
10	理　髪		大
	呉服太物店		大
11	八百政	青　物	大
	しほ屋	料　亭	大

4	吹　田	貸座敷	大
5	田中家	貸座敷	大
	大北火災海上運送保険㈱大阪支店	保　険	昭
6	魚　安	料　亭	大
	池千代	貸座敷	大

1	日本水道衛生工事㈱	水道工事	大
3	菓　子		大
	靴		大
	靴		大

図 2-5　曽根崎新地３丁目の店舗（西側）



20	大進運輸合資会社	陸　運	昭
	㈱是則運送店大阪支店	陸　運	○
	八木運送店	運　送	大

22	薬店		大
	岸興運送部北店	運　送	大
	酒　店		大
23	かまぼこ		昭
24	濱の家	貸座敷	大
25	丸京合資会社支店	運　送	大
62	福井組運送店	運　送	大

26	鈴木運送店	運　送	大
28	美鳥川館	旅宿業	大
29	日野運送店	運　送	大
31	土木建築請負		大
32	琴三味線店		大
	製　薬		大

33	大楠屋商店	洋酒・食品	昭
	建築請負		昭
	かまぼこ		大
	九州新聞社	新　聞	大
34	印刷所		大
	洋紙店		大
	薬　店		大
	丸便運送店	運　送	大

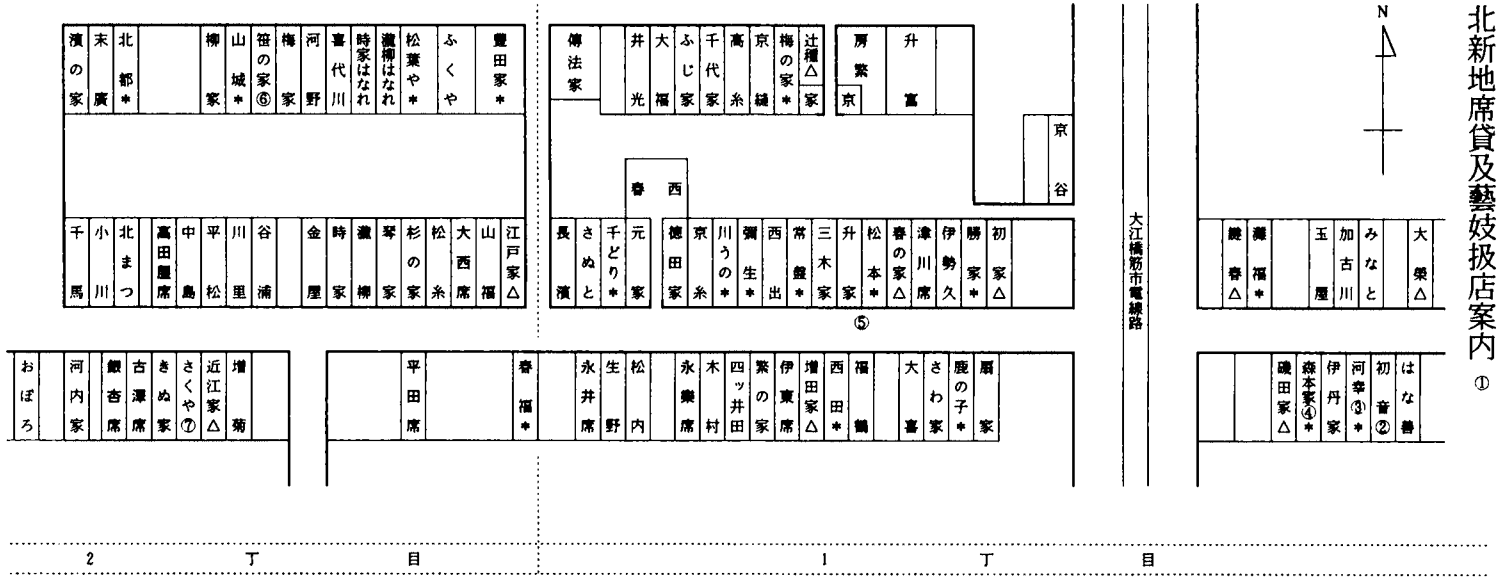
35	福助洋紙店	洋紙・和紙	昭
	歯科医		大
	履　物		大
	石田運送合資会社	運　送	大
	酒　店		大

36	丸共運送店	運　送	大
37	谷川運送店	運　送	大
40	土木建築請負		大
	魚　彌	鮮　魚	大

15	旅　館		大
	旅　館		○
16	㈱三進組	人夫請負・運送	大
	榮組大阪支店	運　送	大

13	米穀店		大
	土地建築請負		大
	製　本		大
	大　初	貸座敷	大
14	表具店		大

図 3-1 北新地の芸妓扱店と席貸の配置図（東側）（大正 11 年）



【注記】

① 第八回浪花踊番付（大正一一年）による。

② 第七回浪花踊番付（大正一〇年。以下、七回番付という）では空欄。

③ 七回番付では「高梅」。

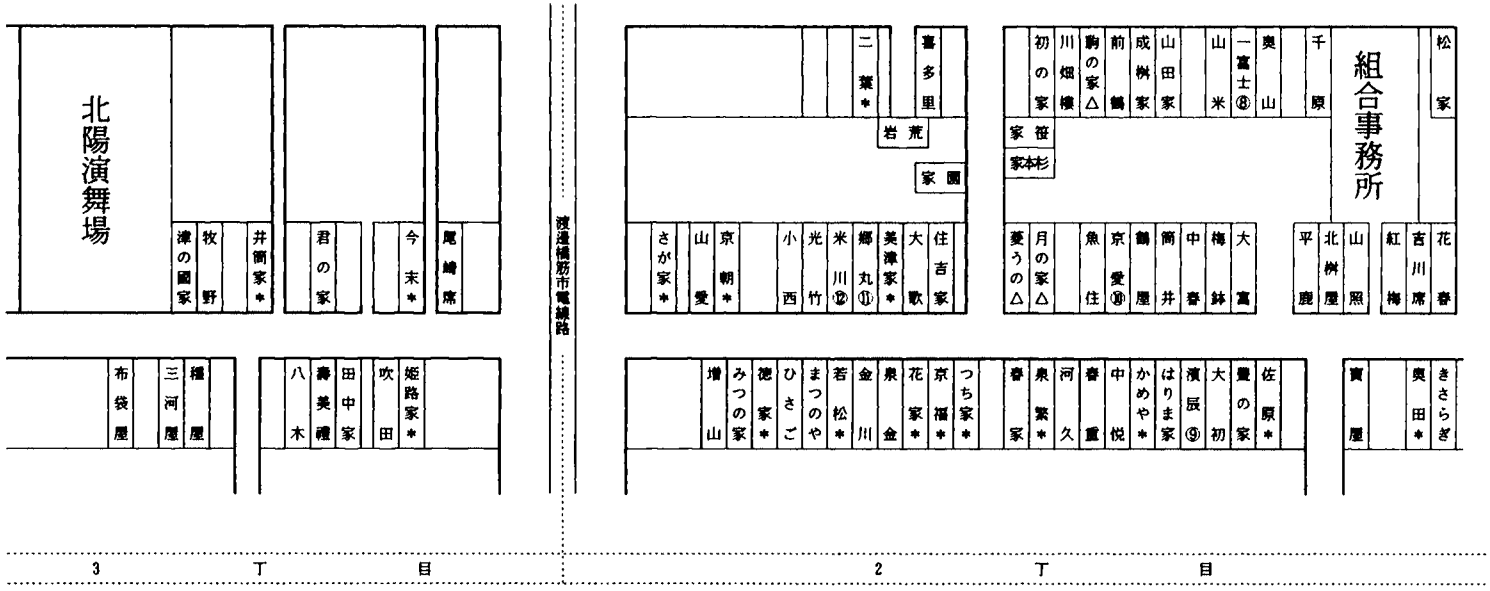
④ 七回番付では「とよ田」。

⑤ 七回番付では「松本」と「桝家」の間に小路があり、北側の小路と繋がっている。

⑥ 七回番付では「泉鶴」。

⑦ 七回番付では「辰巳家」。

図 3-2 北新地の芸妓扱店と席貸の配置図（西側）（大正 11 年）



凡例

一、本図は、第八回浪花踊書付（大正一一年）に付された「北新地席貸及芸妓扱店案内」（以下、「原図」と称する）を翻刻し、必要事項を付記する。

一、原図には曽根崎新地一丁目～三丁目の区画が示されないので、これを補った。

一、原図に付された電話番号は削除した。

一、第七回浪花踊書付（大正一〇年）に付された同名図との相違点を、注⑧～⑫で示した。

一、△印は、大正末または昭和初年に、他の丁目に移転した店舗である。

一、＊印は、大正末または昭和初年に、廃業したと推測される店舗である。

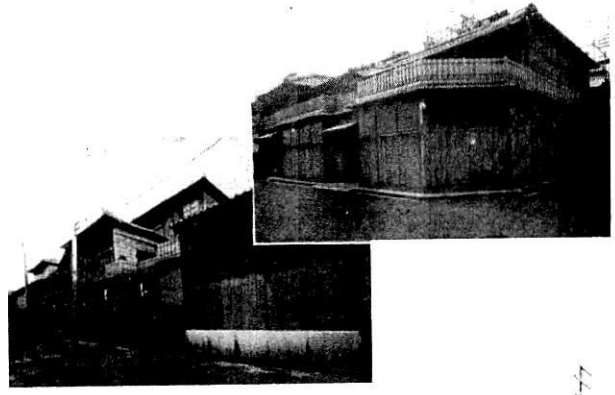
⑧ 七回書付では「千草家」。

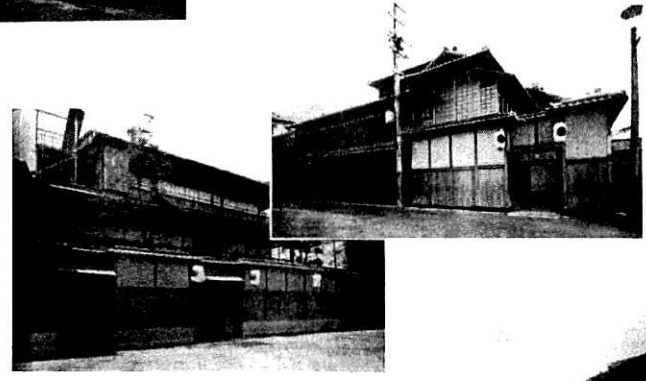
⑨ 七回書付では「喜多村」。

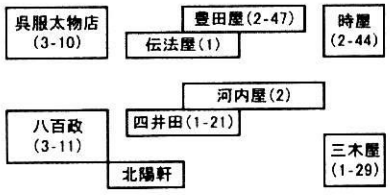
⑩ 七回書付では「伊勢歌」。

⑪ 七回書付では「千代幸」。

⑫ 七回書付では「京愛」。「京愛」はこの交に「伊勢歌」跡地に移転した（注⑩参照）。







付図　北新地店舗の写真

（北陽浪花踊番付による。括弧内は地番）